
Rappelz ~ 名の無き七勇士 ~

なんとく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rappelz(名)の無き七勇士

【Nコード】

N9803C

【作者名】

なんとく

【あらすじ】

現実世界とオンラインゲームRappelzの世界。二つの世界が危険にさらされている。明るい女子高生一喜は偶然見つけたRappelzをルナというキャラクターでプレイしていく途中、不思議な兎に会ってから『名の無き七勇士』として加わる仲間たちと共にモンスター達と戦って世界を平和に導くはめになる…。

ACT1：初心者は女子高生！光のナイト、ルナ誕生（前書き）

以前にもRappe1zに関する別作品を投稿させていただきましたが、誠に勝手ながらなんたぐの都合により、当面こちらの小説の連載を行うつもりです。

誠に申し訳ございませんが、ご了承のほどお願い致します。尚、この小説は2次職業実装前のRappe1zを舞台にしております。

ACT1：初心者は女子高生！光のナイト、ルナ誕生

ここは東京都内にある町、デンバ殿羽町。アパートや戸建の家が立ち並び、近くに商店街やデパートのあるごく普通の住宅街だ。私鉄の殿羽駅から5分歩いたところに公立の殿羽高校がある。そこに一人の明るい女子高生が通っていた。

「おっはよ〜！〜！」

少し明るめの短く毛先がちょつと跳ねてる茶髪でブレザーの制服を少し着崩している女子高生。光山一喜はガララと音をたてて教室のドアを引く。

一喜は既に他のクラスメイトの子達とおしゃべりをしている友人のところへ行き、カバンを置いた。

「おはよ、一喜。」

「麻美ちゃん、おっはよ！」

一喜もその辺のイスに座り、女の子達の輪に混ざる。

「あ、そうだ一喜。まだ5限の授業のことってなかったよね。」

「え？今日の5限って英語でしょ？」

一喜は友人である麻美の一言に目をパチクリさせる。

「それなんだけど、ミチコの奴が急に来れなくなったのよ。だから代わりにパソコンの授業になるんだって。」

「え〜〜〜！？今日は絶対に授業中指されると思って予習したのに〜。」

「そうよね、一喜なんて普段、授業の予習しないし。」

麻美がそういうと、輪の中の女子達がどつと笑い出した。一方、一喜はまだ頬をふくらませ、むくれたままだ。

「だいたい、代わりに違う授業やるくらいなら自習にしてくりゃいいのに〜！」

「……言われればそうね。」

ねえ、と他の女子達も口々にそういった。そこへ麻美が口をはさんだ。

「そうだけど、しょうがないんじゃない？パソコンの授業、めっちゃ遅れてるみたいだし。」

そこで一喜が、でもっと何かいいかけた時にチャイムが鳴り出した。クラスの皆が慌てて自分の席に座りだす。

「おいどけよ、水嶋。」

クラスの男子の一人がそういって一人の男子生徒を突き飛ばした。水嶋と呼ばれた少年は突き飛ばされてよろめきつつも、なんとか自分の席へ辿り着き、ゆっくりと腰を下ろした。一方、少し離れた席で一喜は急いで机の上の教科書やら何やらいろんなものをしまう。

ガラガラと教室の前の扉が開き、そこから女教師が一人入ってきた。セミロングの女教師、赤西は教師机にドスンと持っているものを置くと、少しためいきをつけてから真剣な面差しで生徒を見る。

「皆さん、授業に入る前に残念なお知らせがあります。」

いつもと違う赤西の様子を見て生徒達が少しざわつき始める。赤西は黒い日誌をドンと机に叩きつけ、生徒を黙らせた。

「今まで英語を担当してくださった藤代 美智子先生ですが、昨日の夜遅くに夜道で通り魔にあい辻斬りをされました。」

赤西のその報告を聞いて生徒達が驚きの声を上げ、またざわつきだした。

「え……？美智子先生が通り魔に??」

一喜も目を丸くしてその話を聞いた。麻美も驚いた顔をしている。

「静かに！話はまだ終わってません!!!!」

赤西が再度、机をバンバンと叩いた。

「命に別状はないということです。ただ…、その割には背中を深く斬られたということで出血はひどく、意識不明の重態のようです。」
赤西はそこでふーっと息を吐く。

「そういうことで、本日の英語の授業を急遽コンピュータの授業に

変更します。皆さん、教室を間違えないように。」
それからは普段どおりクラスの出席確認があり、なんとか1限目の授業につながるのだった。

「にしてもビックリしたわよね。ミチコが通り魔に襲われるなんてさ。一体どんなもので斬られたんだろうね。」

お昼休みが終わりPCルームに移動してこれから受ける授業を待つ一喜と麻美だが、一喜からは何も返事が来ない。

「ちよつと、一喜。聞いてる？」

「聞いてる聞いてる。」

「ホントに？・・・て何してんのアンタ。まだ授業前よ？」

「な〜にいつてんの、麻美ちゃん。パソコンといえばインターネットでしょ。」

麻美の隣で一喜はもうパソコンを起動し、勝手にインターネットサイトを見始めていた。

一喜の前のパソコンにはにぎやかなカラフルのページが広がっている。

「一喜、先生にばれたら大変よ？」

「だ〜いじょうぶだいじょうぶ!〜!」

一喜は麻美の言うことを軽く受け流し、あらゆる箇所をクリックしているんなページを覗いてた。

パソコンも、案外悪くないかもね。

なんてことを一喜が考えているときだった。

キーボードカーンカーン・・・

5限の始まりのチャイムが鳴り出した。気付けば回りには移動した生徒達がたくさんいる。

チャイムが鳴り終わった直後にパソコン担当の教師が入ってきた。

「えー、皆さん。今日は突然の授業となつてしまいましたが、構わ

ずに進めますよ。早速ですが、テキスト34ページを開いて。」
教師専用のデスクにつくなりそう言う生徒達はテキストを取り出し、ページをパラパラとめくり始めた。

「今回はここに書かれてるサンプルを元に統計とデータを実際に作成してもらいます。ですので・・・」

教師が今回の授業の内容を説明してるにも関わらず一喜はまだサイト巡りに没頭していた。

おしゃれ関係のページやとある人気芸能人に関するカキコミなど様々なページを見ていた。

(ん・・・?)

そんな中、一喜はある広告バナーに目を止めた。

(人気無料MMO・・・らべるず?)

ただのオンラインゲームの広告なのに何かにひきつけられたようにバナーに書かれてあることを読み返す。

(何だろ、ラペルズって。ちょっと気になるな・・・)

そう思い、その広告バナーをクリックしようとした時だった。

「光山さん!!!!!!」

突然、大声で呼ばれてハッと振り返るとそこには眉間にしわを寄せた教師が立っていた。

「光山さん、貴方一人でなーにやってるんですか?インターネットはオウチで見なさい!!!!!!」

「あゝあ、いいじゃん別に。ちょっとサイト覗くくらい。そんなことでアタシだけあんなに課題を与えることないのに。」

麻美達と別れて一喜は帰宅する。その足取りはちょっとおぼついていた。

その時、授業中クリックしようとしたラペルズの広告バナーを思い出す。

(やっぱり気になるな、あれ。オンラインゲームだっけ。そんなのやったことないけど、なんとなく・・・)

一喜は商店街を通り過ぎ、殿羽駅の改札までやってくる。
(そういえば確か、アタシの部屋にもパソコンあったよね…。)

というわけで、一喜は帰宅すると自分の部屋へ駆け込みパソコンを起動させた。

それからインターネットに接続し、Rappelezと検索する。するとあつという間にRappelezの名前の入った項目が並び、一喜は一番上に来た公式サイトにアクセスした。

「へえ…。これがラペルズ。何だかすごそうだなあ…。」

あらゆる項目をクリックしてラペルズがどんなゲームかを見ていく一喜。オンラインゲーム等全くしたことない一喜だが。

(なんか面白そう!ちょっと、やってみようかな。)

次第に興味が湧いてきた一喜は早速クライアントのダウンロードを始めた。

しばらくお待ちくださいという表示が現れ、ダウンロードゲージがゆっくりと上昇する。

ちょうどその頃、一喜の家のリビングに置かれたテレビでは…。
『臨時ニュース』という文字が画面の上に現れピコーンと音を鳴らす。

その後、『東京都港区において通り魔の被害が10件に上昇。被害者の共通点は特に存在せず、警視庁は無差別の犯行と判断。』という速報が流れた。

「よし!インストール完了!!」

一喜のパソコンではRappelezのインストールが終わったらしい。一喜は早速Rappelezを起動し、送られてきたIDとパスワードを使ってRappelezにログインした…。

Rappelezをプレイするのが初めてである一喜はキャラクターメイキングに取り掛かった。

まず最初に、ラペを生きる3つの人間の種族であるデーヴァ族、ガイア族、アシユラ族の中から1つを選ぶ。どれもクセがあり個性もバラバラだったため、一喜は少し悩んだが、結局彼女はデーヴァ族を選んだ。

そして次は本格的に自分なりにキャラクターを作成する作業に入った。

決めなければならないのは、名前・性別・髪型・肌の色・そして顔つきである。

「やっぱり性別は女の子がいいよね。髪型は……あ、これがいいかも！なんかアタシのとちよつと似てるし。金髪がいいかな。肌の色は白っぽいのがいいなあ。あとは……。」
名前が決まれば完了である。しかし一喜はここでも悩んだ。

「そういえば、パソコンでもハンドルネームなんての使ったことないし。どうしようかな。」

一喜は腕を組んでパソコンとにらめっこをする。

「……うん……、何がいいのかな。」

一喜が組んでいた腕をとくと、何かが肘にぶつかり、床に落ちた。床に落ちたそれは、先月一喜が買った芸能雑誌だった。

一喜は落とした芸能雑誌を手にとる。その雑誌の表紙にはスタイル抜群の女性俳優の姿があった。

「LUNA……かっこよくて美人で素敵だよな。アタシもLUNAみたいなになれるなあ。」

雑誌の表紙を飾る俳優LUNAの写真を見て一喜はため息をついた。が、急にあつと声をあげ、手をポンと叩く。

「そうだ！名前は……ルナにしよう！うん、それがいい！」

一喜は一人頷くと入力欄に「ルナ」と入力した。

「よし！」

そしてガッツポーズを取ると、確認と書かれたボタンをクリックする。

こうして一喜の手によって誕生したキャラクター……ルナはラペルズ

の世界へ飛び込んだ。

気付いたらルナは大きな神殿の前に立っていた。

辺りを見回すと白く美しい山々が神殿一帯を囲んでいる。

「すごい……」

ルナは暫く周りの景色に見とれていた。が、そんな余韻に浸る場合でもなかったりする。

「あ、そうだ。そういえばここに案内人の人がいるんだっけ。」

そう、ルナはこの地に降り立つ前に現れた注意板を読んだのだ。その内容は、オートトラップというものに攻撃をしてはいけないことと、これからやってくる修練者の島のNPCの指示に従うことだった。

「ひょっとして……あれかな？」

ルナの視線の先には、同じ種族であるデーヴァ族の女性の姿があった。ルナは女性に近づき、軽く声をかけてみた。すると、女性はくるとこちらを向き……

「こんにちは。デーヴァの皆様の案内役、ユシスと申します。私たち教官の教育をこなしていけばすぐに一人前の冒険者になれるでしょう。」

とルナに語りかけてきた。ルナの中にワクワク心が生まれ気分が高まるのも気にせず案内人の女性は話を続ける。

「ちなみに私たち案内役や教官の授業をきかない怠け者は島から追い出されることもありますのでご注意ください。」

女性は無表情だがどこか威圧的な顔でそう一言つけた。ルナはその威圧感に少々押され、ひきつった顔ではいと冷や汗をかいて頷くのだった。

「いやあ、緊張したけど思ったより難しくないじゃん！」

ルナは次の指定された場所へ向かって歩いていった。緑と白をベースにした上着とスカートを着用し、右手には長剣が装備されている。広大な平原に一本道が敷かれている。ルナはその道に沿って進んだ。途中、狭い細道に入るところだった。茂みの方から何かガサガサと音がする。

「なんだろ… ってひよつとしたらモンスターだったりして！」

ルナは剣の柄を掴んで茂みをじっと見た。ガサガサと茂みの葉っぱが動く。すると茂みから一匹の小さな兎が顔を出した。

「うわあ〜。か〜わいい！」

ルナは茂みから顔を出す兎のところへ駆け寄る。

「ここには変な鳥や亀や猫しかいないと思ってたけど…こんなに可愛いのもいるんだあ。」

兎の毛並は真っ白でつぶらな瞳は赤く、腕にスッポリと収まりそうな程小さな身体をして、時々耳をパタパタさせている。ルナは兎の可愛さに暫し夢中になり、抱っこしようと手を伸ばした。その途端、突然眩い光がルナと兎の間に現れた。

「きゃっ」

ルナはその光の眩しさで一瞬目をくらませた。

しかしその眩い光は一瞬にして消えてしまった。ルナがゆっくり目を開けるとそこにはさっきの兎がまだ目の前にいる。だが兎はルナを見るなりこちらを鋭い表情で見つめてきた。

「え……？」

ルナにはこの兎の行動がよく分からなかった。自分が一体兎に何かいけないことをしようとしたのだろうか、と考えたその時だった。

「あ、ち、ちよつと！」

ルナが声をかけるのを気にせず、兎はジャンプすると茂みの向こうへ消えてしまった。

「もう……何だったの？」

ルナは軽く首を傾げ、道の先にある大きな門に向かって歩き始めた。

「ちーこーくーするー!!!」

Rappeizをインストールして晩ご飯をとった後も一喜は深夜までプレイしていた。そのため普段より寝る時間が遅くなってしまい、見事寝坊したのだ。一喜の家のある町から殿羽町まで電車一駅ほど。一喜は電車を降りると猛ダッシュで学校へ向かった。

しかしその途中……

「誰かー！誰か救急車を呼べー！」

ふと聞こえたその声の方へ目を向けると、何やら人だかりがある。人だかりは何かを囲んでいるようだ。

「おい、大丈夫か!？」

「よせ！下手に触らないほうがいい！」

「怖いわね、こんな昼間から通り魔に襲われるなんて。」

通り魔という言葉で一喜の心臓が大きな音をたてて跳ね上がった。何か気になる、とても嫌な予感がした。一喜はその人だかりの中に割って入っていった。そして人だかりにあるものを見てひっと声を上げた。

一喜の嫌な予感的中した。人だかりの真ん中で少女が倒れていたのだ。一喜の知り合いではないが、着ている制服は一喜の通う高校のものと全く同じだった。

この事件は殿羽高校ですぐに広まった。生徒達の不安な表情が見てとれる。

「ねえ、一喜。今日は一緒に帰ろうよ。」

なんてことない話なのに麻美はさすがのように言った。

「そ、そうだね。それがいいね……。」

一喜も青ざめた表情で麻美の手をとり、うんうんと頷いた。

朝の通り魔事件のためか、今日は放課後の清掃活動や全部活動は停

止となり、ただちに生徒達は下校していった。一喜と麻美は駅までの道を一緒に歩く。

「こうして、複数で歩けば通り魔もさすがに来ないわよね。」

「うん…。」

二人は、商店街へさしかかる直前の交差点の前までやってきた。朝の通り魔事件はここで起きた。警察の面々が忙しそうに現場周辺を調べている。

「それにしても、問題の通り魔って同一人物だってニュースでは言ってるよね。どんな格好してるんだろう。」

一喜がふと口を開く。麻美は残念そうな顔で首を横に振る。

「それが、わかんないみたい。ミチコの奴が目覚ました後、警察に犯人について聞かれたらしいんだけど、どんなヤツだったか知らないみたいなのよ。」

「そうなんだ…。」

一喜の頭をまだ朝感じた嫌な予感がよぎるのを麻美は知らずにいた。二人は交差点を渡り、駅まで続く商店街を歩いた。

一喜の感じるその嫌な予感は、麻美と別れて帰宅してからも続いた。そんな気分をちよつとでも紛らわそうと、一喜は *Rappeilz* を機動しログインした。

.....

多くの修練者が集まる修練者キャンプに降り立ったルナは、昨日の深夜にこなしでいったクエストの続きをしようと中級教官であるNPCギルダスのところへ向かった。ここで発生するクエストのほとんどはこのギルダスが発信している。

「お、ちゃんと武器も防具もアップグレードしているな。これでこちらのモンスターも簡単に倒せるだろう。」

ルナはちよつと装備してる武器と防具のアップグレードをするクエ

ストを終え、ギルドスに報告したところだった。

「ならば最後に転職試験を受けてもらおう。」

「転職？」

ラペルズのキャラクターは誰でも職業を持っている。種族によって与えられる職業は違うが、どれも個性的であらゆる力を発揮できるものばかりであり、キャラクターの強さの基盤でもある。因みにルナの現在の職業はガイド。デーヴァ族にとって必要な基本職業だ。ルナはギルドスに指定された場所へ向かった。転職試験は別のNPCが担当しているらしい。

ルナは転職試験を担当するNPCの女性に話しかけた。

「貴方、転職試験を受けるのね。」

「は、はい！そうです！！試験ってどんなのですか？」

「転職試験の内容は、修練者OBであるトリスタンの課題をクリアすることよ。試験会場は遠いから特別に私がレポートしてあげる。帰りは自分で歩いてきてね。」

「え？レポート？？」

レポートといわれてもルナはあまりピンとこなかった。

「じゃ、いつてらっしゃい。」

突然パソコンの画面が真っ暗になり、ローディング画面がしばらく流れていった。

気がつくところには海岸だった。少し歩けばただっ広い砂浜に入ることが出来る。

取り敢えずルナは辺りを見回した。目指すは試験会場。OBトリスタンを見つけないならならぬ。

「ん……？」

ルナは海岸からポツンと離れたところに建ってる小屋を見つけた。その入口に一人のNPCの男が立っている。恐らくあれが修練者OBのトリスタンだろう。

ルナは小屋のところまで走り、話しかけた。

「ああ、転職試験だろ。デネブから既に連絡は来ている。今から私の出す課題をクリアしてもらおうよ。」

デネブとはさつきルナをここまでレポートで送ったNPCの女性だ。ルナは緊迫の表情でうんうんと頷く。

「私の課題は、泣く子も黙るあのアナテーマを3匹とつかまえることだ。」

「泣く子も黙るって…」

それ程この修練者の島でアナテーマは脅威な存在なのだろう。ルナはここでも嫌な予感を感じた。でもこの課題をクリアしなければ転職試験に合格出来ない。ルナはこの課題を受けることにした。

「うーん…どんなモンスター何だろ、アナテーマって。」

トリスタンから教えてもらったアナテーマの居場所、潮の香りの坂道を目指してルナは歩く。

小屋から潮の香りの坂道まで距離はかなりある。海岸から離れたら更に銀杏の森を越えなければならぬのだ。それでもルナは自分の足で目的地まで向かっていく。というよりそれしか目的地へ向かう方法を知らない。

出発してから数分後、ルナは銀杏の森へ入った。これを越えれば目的地である潮の香りの坂道にたどり着くことが出来る。だがそこで何か変わったことが起きていた。

向こうから二人の男女が走ってくる。そしてルナの横を猛ダッシュで通り過ぎていったのだ。ルナは不思議そうに走り去る二人を眺めた。その後なんと同じところからルナと同じ基本職業の者達が先ほどの男女と同じように走ってきた。ルナはさすがに不審に思い、自分の横を通り過ぎようとした同種族の男性を捕まえた。

「どうしたの？さつきから人があっちから来てるけど。」

「は、離してくれ！急いでるんだ！早く逃げないとやられちゃう！」

ルナに手首を掴まれたデーヴァの男性は青ざめた顔で懇願する。

「やられるって誰に？」

「アナテーマだよ！あのアナテーマ、普通じゃない！完全に狂ってる！！！」

「アナテーマ！？」

アナテーマといえばルナがこれから転職試験で狩るモンスターだ。だが……

「潮の香りの坂道に行こうだなんて思わないほうがいい！自ら死にいくようなもんだぞ！！！」

男性はそう言っつてルナの手を振り払うと転がるように行ってしまった。

(一体、あそこで何があったんだろう……。)

ルナは潮の香りの坂道へ走り出した。

銀杏の森を走る中、何人がさっきのデーヴァの男性のように逃げていく人達とすれ違った。なかには悲鳴を上げる者もいた。そして森を抜ける直前に沢山の怒号と悲鳴が聞こえてきた。問題のアナテーマのいる場所はもう目の前まで来ている。

一度ルナは足を止めたがすぐに潮の香りの坂道へ入った。ここでは悲鳴だけでなく、金属音のぶつかるような音も聞こえる。歩道から外れたところには、ごく普通のモンスターもいた。が……

「……！！あ、あれがまさか……！！！」

ルナはあるものを見て言葉を失った。ルナの前方には、表記された薄いピンクのような皮膚に赤いラインのある人型のモンスターが両腕の刃で立ち向かう冒険者をズバズバと切り伏せているのだ。光景があった。頭上に表記された名前は……アナテーマだ。しかしこのアナテーマは白い文字で表記される普通のモンスターと違い、名前が赤い文字で表記されていた。横棒で表されてるヒットポイント（HP）ゲージも減る様子が全くない。戦おうとする者だけでなく、逃げようつとする者まで斬りつけるアナテーマの様子を見てルナは両手足が震えた。あんなのを相手にするのかと思うと急に怖くなり前に進む

ことが出来なくなってしまうのだ。そんな中、アナテーマがルナに気付き近づいてきた。

「え……う、うそ………」

ルナは震えた唇で必死に言葉をもらす。逃げなければ。頭の中でそう考える。でも、足が動かなかった。アナテーマはこちらのことなど構わずどんどん近づいてくる。ところがルナの足がもつれ、尻餅をついてしまったときだった。

…走れ!!

…

どこからか声が聞こえた。ルナはその声を主を探そうと首をぐるりと回す。

早く…走るんだ…早く…!! - -

その間にもアナテーマはどんどん向かってくる。

さあ、急げ!!!

不思議なことにルナはその声に押されたように立ち上がり、アナテーマに背を向けて必死に走り始めた。当然アナテーマは追いかけてくる。その間にもルナの耳の中では走れと呼びかける謎の声がこだました。ルナは何も考えずにその声に従ってひたすら走った。そうしていくうちに銀杏の森の入り口が見えてきた。ルナはラストスパートをかけて全力疾走する。アナテーマとは少し距離が出来た。

ここだ。ここへ…来るんだ!!

ルナは走りながら声のする方向へ耳を傾けた。すると、森の入り口から少し見えづらいうところに深い草の茂みがあった。それを見つ

たルナは銀杏の森へ突入し、飛び込むように茂みの中へ潜った。するとアナテーマは追うのを諦めたのか、すすごと潮の香りの坂道の方へ戻っていった。

茂みの中からアナテーマが離れていくのを見たルナはほっと胸を撫でおろした。

「危ないところだったな。」

背後から声がしたのでびくつと肩を震わせ振り向くと、そこには小さな兎が一匹いた。

「ああ！昨日のウサギ！」

そう、この兎はルナが昨日道の途中で見たあの小さな兎なのだ。

「あれ？でもさっき声が聞こえてたよね。誰がしゃべったんだろ……」

「何言ってるんだ。オイラに決まってるだろ。」

「え……………」

ルナは目を丸くして兎をマジマジと見つめた。なんとこの兎が……

「う、ウサギが…………し、し…………しゃべったー！！！！！」

ルナはお化けでも見たかのようにとびあがった。

「今は驚いてる場合じゃないぞ。」

兎は冷静にピシヤリと言う。

「ど、どういうこと？」

ルナが恐る恐る尋ねる。

「あのアナテーマは普通のモンスターとは次元が違う。どんな一般ユーザーが戦おうとしても、アイツには傷一つもつけることは出来ないんだ。」

「じゃあ、誰もさっきのアナテーマに勝つことは出来ないわけ？」

「いや、そんなことはない。」

兎は首を横に振り、急に目を輝かせながら続ける。

「あのアナテーマを、いや、赤ネームのモンスターを、ある選ばれた勇士のみが対等に戦うことが出来るんだ。」

「な、何？その選ばれた勇士って。」

「詳しく話してやりたいところだが今は一刻も早くアナテーマをどうにかしなくてはならない。ハッキリ言おう、あと聞いて驚くな。その選ばれた勇士の一人は、アンタなんだ!!!」

「ええええ!!!?」

ルナは冷静に聞き入れるどころかもうめちやくちやに驚いてる。まだ信じられないと言わんばかりの顔だから兎の表情は真剣そのものだ。

「あ…アタシがあんなのと戦うの!?む、無理だよそんなの!!!」

「ああ、確かに今のその状態では無理だな。」

兎はくるりと一回転した。すると草の上に何かが落ちた。

「ところであんた、名前は?」

「な、名前…?」

兎は黙って頷く。

「アタシの名前は、ルナ。ルナっていうの。」

「そうか。オイラはムーンラビットのヴィヴィ。さあルナ、オイラがドロップしたこのアイテムを拾うんだ。」

「ドロップ…。あ、これのこと?」

ルナは草の上に転がる黄色く光る小さな石を拾う。その光の色がルナが初めて兎と会ったときに現れた眩い光の色によく似ていた。

「拾ったな。これはソウルストーンといってとても大事なものだ。絶対に無くすなよ。」

ルナがインベントリを開くとそこにはさっき拾った黄色のソウルストーンがあった。

「さあこれで準備完了だ。あとはルナ、ジョブチェンジ オン ライトと叫ぶだけだ。」

「え…?何それ。ジョブなんか…て。」

オンラインゲームですら初めてのルナにとってこの兎から発せられる単語は未知のものばかりだ。ますます困惑した顔でヴィヴィという名の兎を見つめる。

「ジョブチェンジ オン ライトだ。ん…その、戦うために必要

な呪文みたいなもんだ。これを叫べばアンタは今よりも数十倍強くなる！とにかくやってみるんだ、ルナ！」

「わ…わかったわよ…言えればいいんでしょ？」

ルナはすくつと立ち上がると手に握ったソウルストーンを掲げて叫んだ。

“ ジョブチェンジ オン ライト ” ……！！！！！！！！

するとルナの身体から眩い黄色の光が爆発するように現れた。思わず目を瞑ってしまうほど眩いその光はルナの身体をすっぽりと包み込む。光の中で何かが起きているみたいだ。しばらくすると光が外へ弾け飛んだ。

そこから現れたのは何もかもが一新されたルナだった。緑と白をベースにした上着とスカートではなく着ているのは頑丈そうだがどこかスマートな真っ白い鎧。武器は安っぽい長剣でなく鋭く長い光の剣。更にもう片手には銀色の盾が握られていた。

「おおおおお！！ついに、誕生した！！光と希望を司る勇士ナイトがあああ！！！」

ヴィヴィが目を潤ませながらその光景を見た。それに対し当のルナは…

「ええええええ！？な、何これー！！！！！！！！？」

自分の変わった格好を見てかなり慌てている。

「さあルナ、ナイトにジョブチェンジ出来た今のアンタなら、あのアナテーマを倒せる！」

「えええ！？ホントにあれを倒しに行くのお！？」

「だーいじょうぶ。オイラもついて行くから！ほれ、いーくぞー！！」

その頃潮の香りの坂道では…

「くそっアナテーマなら前にクエストで倒したことあるはずなのに

…何で倒せないんだ!!」

ある男が杖から魔法を飛ばして名前が赤色で表記されているアナテ
ーマにダメージを与えようとする。しかしアナテーマには効果がな
い。アナテーマは男に向かって両腕の刃物をぎらつかせて突進して
くる。

「ひ…ひいいいいいい!!」

男はアナテーマの気迫に押されて両腕で頭を抱える。そしてアナテ
ーマが容赦なく男に襲いかかろうとしたときだった。

「待ちなさい!!!!!!!!」

アナテーマは男への攻撃をやめ、声のした方へ向く。そこにはジヨ
ブチエンジしたルナとヴィヴィがいた。

「修練者の行く手を阻むアナテーマ!も、もう…好きにさせないわ
!!」

「なんか迫力に欠けるなあ。」

ルナの台詞に対しヴィヴィが突っ込む。

すると、アナテーマは攻撃対象を男からルナへ変えた。男はその隙
に逃げていった。

「うそお!!ホントに来るよー!!」

「戦えルナ!!!!」

ルナをすかさずアナテーマの刃が襲う。声をあげ、なんとかルナは
攻撃を回避する。しかし休む間もなくアナテーマは攻撃してくる。

それに対してルナはアナテーマの攻撃から逃げてばかりだ。

「おい!!な〜にやってるんだ!!早く攻撃しろ!!」

「そんなこと言っただってー!!きゃあ!!」

ルナはアナテーマの攻撃をまた寸でのところでかわした。ヴィヴィ
のはねた耳ががっくりと垂れ下がる。

「ルナ!!とにかくアンタからも攻撃だ!あんなヤツ必殺技で木っ
端微塵だぞ!!!!」

「なにー！！必殺技つてえええー！！？」

「ナイトの必殺技だ！！あんなら出来る！！！」

「出来ないよー！！！！！」

ルナは逃げながらそう叫び散らす。しかしその時、

「きゃー！」

ルナは平地に刺さってる石ころにつまずいて派手に転んだ。

「ルナ！！！！！」

ヴィヴィは血相を変えてその様子を見た。ルナが少し痛そうに地面にぶつけた部分をさする。そんなルナにアナテーマが近づいてきた。「避けるー！！！！！！！」

ヴィヴィの叫び声と同時にルナはハツとなり素早く転がるようにアナテーマの刃を交わした。するとルナを狙ったアナテーマの刃の腕が地面につきささった。すぐに抜けないところからしてかなり深く刺したことが伺える。

「今だルナ！！必殺技は、ホーリークロスだ！！！！！」

「ほ、ホーリークロス？」

「さっきも言っただろ！ナイトの必殺技だ！！早く！！！！！」

「わ、わかった！」

ルナはさっきの慌てた顔とは違うキリつとした表情でアナテーマを真っ直ぐ見据え、右手の長剣を立てる。するとルナの周りに光のオーラが立ち込める。その光のオーラはやがて剣に吸い寄せられるように集まっていく。その間にもアナテーマは地面に突き刺さった刃を抜こうとしている。そこへ光を帯びた剣を一振りし、ルナが走ってきた。

やっとアナテーマの腕が解放されたその瞬間、

「ホーリークロス！！！！！！！！！！！」

ルナが剣を縦と横にそれぞれ一振りずつアナテーマの胴体に払った。それだけではない。振られた剣の軌跡から十字の光が現れ、アナテ

「マの身体を貫く。ホーリークロスが発動したのだ。ホーリークロスを受けたアナテーマは大きく身体をのけぞらせるとそのまま大きな音をたてて爆発した。もうそこに、アナテーマの姿はなかった…。その直後、突然謎の光がルナの身体を覆った。少しすると光は一気に飛び散り、そこには元のラペルズを始めたばかりの格好に戻ったルナがいた。

「…な…な…なんなのこれ…。」

ルナは先の戦いで疲れが出たのか、地面にそのままぺたりと座り込む。そこへ…

「よくやったぞー！ー！ルナ！！！」

勇士ナイトの初勝利をしっかりと見たヴィヴィが感激のあまり飛び跳ねながらやってきた。

「最初はまあこんなカンジだ。どんどん経験を積みばだんだんナイトらしくなるだろ。」

「ちょ、ちょっと待ってよ。アンタの言ってる意味がよくわかんないんだけど。だいたい勇士って何のことよ！！！」

「そうだな。先ずその話をするべきだな。」

ヴィヴィは2本の耳をピンと真っ直ぐ立てて話し始めた。

今、二つの世界が混沌と破滅の危機にさらされている。一つはこのラペルズの世界。そしてもう一つはルナこと一喜の住む現実…リアルの世界。近頃では、普段とは違う狂ったモンスターがラペルズの世界に現れて人々を、世界を荒らしている。その影響はリアルにも何らかの形で及んでいるという…。

そんな二つの世界を救うために何者かによって生み出されたのが『名の無き七勇士』…その一人である光と希望を司るナイトがルナなのである。名の無き七勇士は、そんな世界を混沌と破滅に陥れようとするモンスターを排除し、世界の平和を保つためにあるのだ。

「だからルナ。世界を救うために、あなたはナイトになってあのア

ナテーマみたいに人を襲うモンスター達を倒すんだ。」

ヴィヴィの表情は真剣そのものだ。しかし……

「そん……なあ…冗談でしょ？」

ルナは呆然となった。まだ信じられなかった。何で自分達の世界まで危険にさらされるのか。何で自分は勇敢にモンスターと戦う勇士なんかに選ばれてしまったのか…。

「その内世界はアンタを必要とする。それがいずれ分かる時が来るはずだ。」

じゃあなとひと言いうと、跳躍してルナから離れていった。

ルナは座りこんだままうつ向いた。そんな彼女の背中を夕日の光が暖かく照らす…。

ACT1：初心者は女子高生！光のナイト、ルナ誕生（後書き）

Rappelz『名の無き七勇士』プチ用語解説！？

このコーナーでは、各サブストーリーに出てきた用語の一部をごく簡単に解説します！

・デーヴァ族

白い肌で金髪または蒼髪の外見の者が多い。使用する主な魔法の属性は光。副属性として水と土の力も持つ。攻撃力よりも若干防御力が高い。ルナもこのデーヴァ族である。

・NPC

ノンプレイヤーキャラクターの略称。その名の通り、プレイヤーの操作しないキャラクターのこと。Rappelzでは主にアイテムやクエスト、ゲームにおける情報を提供してくれる。

・クエスト

主にNPCの出す依頼みたいなもの。その内容は様々であるが、依頼を引き受けて指定されたことを達成すると、それに合った報酬が手に入る。

ACT2：倒セルナ！ラベルズとリアルで暴れるモンスター！！（前書き）

殿羽高校に通う女子高生、光山 一喜はある時無料オンラインゲームラベルズをダウンロードし、デーヴァ族のキャラクタールナを作ってプレイし始めた。ルナはここでしゃべるムーンラビットヴィヴィに出会い、ソウルストーンを手に入れ勇士ナイトにジョブチェンジ。突如現れた赤ネームのモンスター、アナテーマを倒した。ラベルズとリアルの世界が混沌と破滅の危機に迫いやられ、世界を救うために選ばれた勇士がルナであるとヴィヴィは語るのだった…。

ACT2：倒セルナ！ラベルズとリアルで暴れるモンスター！！

一喜ことルナがRappeizの世界で赤ネームのアナテーマを倒してから、通り魔の被害はびたりと止まり、その後も同じ事件が起ころことはなかった……。

「先生！これです！！」

殿羽高校の女子高生、光山 一喜はパソコンの教師にどさつと何かプリントしたものを数枚提出した。

「……うむ。まあ、それなりにやってますね。」

「それなりって何ですか！ちゃんと課題やったじゃないですか！」
教師の曖昧なコメントが気に入らなかったのか、一喜は思わず教師机から身を乗り出して抗議する。一喜の提出したプリントには、円グラフや表など、何やら統計データがぎっしりと書かれていた。

「それはともかく、ちゃんと真面目に授業を受けないからこんなことになるんですよ。次また勝手にインターネットを見てたりしたら、今回よりも多く課題を出しますからね。」

「……はい。」間の抜けた返事の後、一喜は教師に帰るよう促されそのままPCルームを後にした。

一喜は電車から降りるといつも帰る家路とは違う方向へ足を運んだ。大きい交差点の一角にある小さなお店『イージーカフェ』。割りときざっぱりした喫茶店だ。一喜は交差点を渡るとその喫茶店に入っていた。

「いらっしやいませ……て光山さんか。」

「こんにちは。」

学校にいた時とは違い、ご機嫌な様子で一喜は店の中に入る。（だつてここには……）

「店長なら厨房にいるから早く挨拶に行きなよ。」

「はい!!」

一喜はるんるんと喫茶店の厨房へ駆け込んだ。

「こんにちは〜!!」

厨房に入るなり一喜は元気よくそこにいる人物に挨拶する。

「やあ、一喜ちゃん。今日もお願いするよ。」

「はい、喜んで!」

爽やかスマイルで振り向いたのはこの喫茶店『イージーカフェ』の店長、大石だ。長身で肩まで綺麗に揃えられてる黒髪と端正な顔立ちの彼は、手先も器用なので料理も上手である。

一喜は厨房の隣にある更衣室に入り、いつものアルバイトの恰好に着替えた。

白いワイシャツの上に黒いベストを着用し、更に黒のスカートで腰にエプロンを付ける。一喜は着替えた状態で更衣室と厨房を出る。

「あ、光山さん。俺がレジやるから次来るお客さんから注文とつてくれない?」

「了解!!」

一喜は友達と遊ぶことが何よりも大好き。そのための経済的余裕も欲しいところである。そこで両親と学校の了承を得て週に一度、喫茶店『イージーカフェ』で働いているわけだ。

ここに働くきっかけは……

(だって店長の光山さんが超ハンサムでカッコイイんだもん!!)

ということだそうだ。この喫茶店は女性のスタッフが少ないせいか、一喜はすぐに採用され、注文を取ったり料理を運んだりレジで会計をしたりと仕事は多い。それでも一喜はこの仕事を楽しみにしていた。何故なら……

(光山さんに誉められる程最高なことないもん〜!)

ということらしい。この店長も人気俳優LUNAに続いて一喜の憧れのようだ。

「一喜ちゃんは今日も頑張って仕事をしてくれてるね。」

「あ、ありがとうございます！でもそれほど……」

大石は厨房でコーヒーフロートを作るとそれを一喜の用意したトレイに乗せる。

「とんでもない！一喜ちゃんが来てくれてるおかげで大分僕らも余裕を持って働けるようになったんだから。」

「大石さん……」

「これからも期待してるよ。一喜ちゃん！」

『イージーカフェ』のアルバイトを終えて一喜は機嫌よくスキップでもしながら帰宅した。

夕食を食べ終え、明日の時間割りのチェックを終えると幸せそうな表情でベッドにダイブする。

「期待してるよ……だって〜！きゃああ！大石さ〜ん！！！」

一喜は喜びのあまり大石に言われた言葉を何度も繰り返す。仕事をする際時々言われることなのだが、やはり一喜から見たら人当たりがよくかつこいい店長にそんなことを言われるのはこの上なく嬉しいのだろう。

「これでもっともっと頑張って仕事すれば……。」

（一喜ちゃん、君は本当に他の誰よりも頑張りやだね！僕はそんな一生懸命な一喜ちゃんが……。）

「好きだよ〜！〜！とか！！ああ、大石さ〜ん……」

そんな大石の妄想に浸る一喜だがむくつと起き上がるとベッドから降りてパソコンを引っ張り出した。

「さて！折角時間があるわけだし。ラペルズでもやろつと！」

パソコンの電源を入れて、ロードするのを待つ。

(そういえば、あんなことをしてからもう3日か……)

一喜は3日前、ラペルズをプレイした時に起こったことを考えた。ヴィヴィという可愛いけど変な兎からソウルストーンっていう知らないアイテムをもらって。それからいきなりよくわかんないのに変身して普通じゃないモンスターと戦って…。

一喜はため息をついた。本当に自分がこれからあんなことをしないとイケないのかと思うと気が少し沈んだ。それに、リアルでもいかにも危険というカンジがしない。

いろいろ考えつつも、一喜はラペルズを起動し、ログインした…。

ルナは先の戦いでアナテーマを倒したため転職試験に合格し、無事修練者キャンプへ戻ることが出来た。潮の香りの坂道にいるアナテーマも、この前みたいに大暴れすることがなくなったという…。

ジョブサポーターによって1次職業に転職させてもらうと、オルニトに乗って次の教官、NPCの上級教官ランスロットのところへ出発した。

「は・やーいーい！！オルニトって便利だな。」

オルニト乗って草原や海岸を楽々と超えていくルナは、やがてランスロットの待つ銀杏の森の一角に辿り着いた。

銀杏の森はキャンプの外と同じようにモンスターも出没するが、NPCのランスロットのいる小さな祠のようなどころだけは辺りにモンスターがいないため、しんと静まりかえっていた。

「いよいよ修練者の島も大詰めってとこかな。」

NPCに話しかけ、クエストを引き受けようとしたときだった。

「よお〜！！ルナじゃないか〜！！！！」いつになく陽気な声と共に一匹の兎がルナの前に飛び出した。

「ん…？…あああ！！！！この前の…えっと…兎！！！！」

「ヴィヴィだよヴィヴィ。覚えてくれ！一応アンタのサポート役なんだから。」

「サポートって何の？」

「決まってるじゃないか。それは

「何とかの七勇士でしょ。」

ルナはそっけなくヴィヴィの言おうとしたことを言った。

「よく分かってるじゃないか！！」ヴィヴィは長い兔の耳をパタパタと動かし、目を輝かせてコチラを見る。それに対しルナは何だか急にやる気のなさそうな顔になる。

「これからいつこの前のアナテーマみたいな奴がこの世界に現れるか分からない。そのためにはもちろんルナ個人のレベルを上げることも必要だ。だいたい修練者の島どまりじゃ勇士としていろいろ不都合だらうし……」

「言っとくけどアタシ、勇士なんてやらないから。」

「……………え？」

突然ふってきたルナの言葉にヴィヴィはかたくなる。

「おい、今なんていった？」

「だーかーら！！アタシはそんな正義のヒーローみたいな勇士なんてやらないって言ってるの！！」

「え、ええええええ！！？」

ヴィヴィは愕然となつてルナの足元に駆け寄り、すぐるように訴え始める。

「そ、そんなこと言うなよ！！ルナは、ルナは選ばれた勇士ナイトなんだ！！アンタがそんなことを言ったら」

「だいたいアタシ、勇士として戦うためにラペやってるんじゃないの！！！！」

「そりゃそのためにラペルズの世界にいろとは言わないさ！個人の自由でもあるんだから！！」

「個人の自由って……あんた初心者のアタシに会うなり勇士になって化け物を倒せて言ってきたじゃない！！」

「そりゃ気持ちわかるよ！いきなりそんなこと言われたら誰だつて驚くさ！！でもアンタがナイトになることは決まってたことで」「じゃあどうしてアタシがナイトに選ばれたわけ！？あんた説明出来るの！！？」

ルナも負けじとヴィヴィに何か言われる度に言い返す。ヴィヴィはルナの今の問いに少々言葉を詰まらせる。

「そ、それは…運命だから…ってそうにしてもしなくても！！！！」「ヴィヴィは兎の可愛い潤目でルナを見上げる。「アンタがやってくれないとホントに世界が危ないんだ！！このラペルズの世界だけじゃない！！アンタ達の住む人間の世界、リアルだつて危ないことになるんだ！！それは嫌だろ！だから頼むよ！ナイトになってこれから襲つてこようとする赤ネームのモンスターを…」

「！！！！！！」

「……アタシには無理だから、そういうのは他あたつて！！」

ヴィヴィの力説も結局通用しなかった。ルナはこうはき捨てることルニトにまたがり、森の奥へと行ってしまった。

「る、ルナ……！！」

オルニトの勢いで転がったヴィヴィは必死にルナを呼んだがルナが引き返してくることはなかった。

「はあ……。」

ヴィヴィは深いため息をついた。折角見つけた勇士だったのに、あそこまで頑なに否定されてしまった。ヴィヴィはますます落ち込む。「他をあたれつて…ていうかオイラじゃなくてあのソウルストーンがルナを選んだというのに……。」

ヴィヴィの深いため息は絶えなかった。確かに初めてルナに会ったとき、黄色のソウルストーンは間違いなく光った。そう、この者が勇士に適任することを知らせる光が。見た目だつて、さすがに場所が修練者の島なのでそんなきらびやかな格好ではないが、間違いなくナイトも使用する武器の種類、長剣を装備していたわけで…。

「ん……待てよ？銀杏の森でクエストをやっていることは…転職したんだな？ルナは」
ヴィヴィはルナの行った方向へ駆け出した。

ヴィヴィの予想通り、ルナは銀杏の森の少し広いところでモンスターを狩っていた。

「この！この〜！！」

剣なのに何故か叩いてるように見えるのが不思議だがそんなことは気に留めず、ヴィヴィは慎重にルナを見た。服装は出会った時と同じ、緑と白をベースにした服。武器はランク1の安っぽい長剣。しかしこの前と違うものが一つあった。右手で長剣を持っているのだが左手には出会ったときになかった安っぽい盾がおさめられていた。おそらくキャンプでルナが買ったのだろう。しかし何よりヴィヴィはルナのステータスをもう一度確認したかった。知りたいものがあったのだ。

ヴィヴィはルナに何かをロックオンした。そこから読み取れるのは相手の名前と種族、そして職業。ヴィヴィはかもし出される情報を読み取ると、ルナから目を離れた。そして口で言わずに呟く。

（ルナの転職した職業は、ファイターか。間違いない、やはりルナは光と希望を司る勇士ナイトだ。）
ヴィヴィのその考えは、希望から確信へと変わった。

ここは東京都内にある閉館後の水族館。
警備員の男が懐中電灯を手に暗い水族館の中を歩く。魚達はプラスチックの広い水槽の中で悠々と泳ぎ回る。

館内を一通り回った男は一息つき、守衛所へ戻ろうとした。しかし…

ある異変が突然起こった

男は何か異様な音を耳にし立ち止まった。何かが泡立っているような音だ。どうやら自分の周りから聞こえてくる。ふと水槽に視線を移した直後、男は恐怖のあまり懐中電灯を落とした。床に懐中電灯が落ちた時の音が館内によく響く。

「な、何だこれは……。」

男は恐怖に顔がひきつり、水槽に近付いて見ることが出来なかった。水槽の中では今までにない不可解な現象が起きていた。熱帯魚達の身体から泡のようなものが煙のようにモウモウと放出される。それは透明な色から次第に魚達の血の色に変わり、高い水面へと上っていく。同時に熱帯魚達の鱗や肉が削がれていき、最後には骨だけになって水槽の底へ沈んだ。

一部始終を見た男はひきつった声で絶叫した。男の叫び声が館内にこだまする中、水槽の全ての魚が骨だけになり水族館はもう熱帯魚の墓場と化していた。

「ふあああ……。」

眠そうな顔で制服姿の一喜が2階からリビングへ降りてくる。

「おはよーママ。」

一喜は既に椅子に座ってテレビを見る母美都子に声をかけ、朝食の置いてあるテーブルを見る。

「おはよう一喜。それより見てこのニュース。」

一喜は寝ぼけ眼でテレビに流れているニュースを見る。内容を見た途端一喜は一気に目が覚めて食い入るようにテレビを見た。

ニュースの内容は至って信じられないものだった。水族館で保管されてる全ての熱帯魚が屍になっているというもので現場での中継も行われてた。骨になった魚は一部撤去されたいが、カメラには熱帯魚の無惨な姿が写し出された。

「何これ〜。気持ち悪いー。熊とか猫が入ってきたのかな？」

「見回りをした人の話だと魚がひとりでああなっただけだよ？」

「ええ!？」

前からニュースを見ていた美都子の話を聞き、一喜は目を丸くした。生物の授業が始まるまでの間、一喜は麻美に例のニュースの話をした。

「ああ、それあたしも見たよ。なんか怪談話がホントに起きちゃったってカンジよね。」
「うん。アタシああいうの苦手なんだよね。」
「今に始まったことじゃないでしょ。アタシちゃんと覚えてるわよ。小学校の時の肝だめしでシート被った先生に肩触られただけで大泣きしたじゃない。」

「だ、だってあれは…ホントに怖かったんだもん。」

「それと佳代が懐中電灯に自分の顔を当てただけなのに一喜だけ飛び上がったってパニクってたわよね。」

「だってあんなの怪物以外の何にもないじゃん!!」

「……佳代が聞いたら怒ると思うわ。」

一喜はしまったと言わんばかりの顔をして両手で口を塞いだ。

その直後だった。ぎゃあ!!と準備室の方から悲鳴が聞こえた。

「今の声、生物の谷中先生!？」

「行ってみよう!」

二人は生物室と準備室をつなぐドアを開けて中へ入っていった。

「先生!どうしたんですか!？」

「何があ……え、う……うええええ!!?」

一喜は生物担当の谷中の目の前にあるものを見て声を上げた。

谷中の目の前には水の入った小さな水槽があり、底には骨になった小さな魚が1匹横たわっていた。

「は、はなこおお……」

谷中は震えた声で無惨な姿になった魚の名前を呼び、その場に突っ伏していた。

「はなこって、確か先生が学校で飼ってた金魚のことよね。」

「う、うん……。」「水族館で起きた事件と同じことが目の前で起こった。こんな偶然があるだろうか。ふとヴィヴィの言った言葉が頭をよぎった。

狂ったモンスターがラペルズの世界に現れて人々を襲い、荒らしていく。その影響はリアルの世界にも及んでいる…

だが一喜はふるふると頭を振った。

（そんなの何かの夢よ。別にリアルにモンスターが出てくるわけじゃないし）

一喜はそう考え、骨になった金魚のはなこを見つめた。

谷中のテンションは低かったが生物の授業は滞りなく進んだ。しかし、この時から一喜は何か嫌な予感がしてならなかった。

（あんなの、ラペルズのモンスターとは関係ないと考えようとした時なのに…。）

そう決めたのに心のどこかで嫌な予感がするのだ。そう、以前通り魔事件を目撃してしまった時に感じた嫌な予感と似ているのだ。

「ねえねえ麻美ちゃん。」

これから下校しようとする親友の麻美に一喜は声をかけた。

「何？どうしたの??」

「これからさ、プリクラ撮りに行かない？最近一緒に行っていないじゃないか。」

「ああ、そうね!!いいわ。行きましょ!」

一喜はこの嫌な予感を少しでも紛らわそうと麻美と一緒にゲームセンターへ寄り、プリクラを撮りに行った。しかしその後帰宅しても嫌な予感は治まらなかった。

（何でさっきからこんな胸騒ぎがするんだらう…。）

一喜はラペルズにログインしようとした手を止めた。

「また勇士にならなきゃなんてこと…ないよね？」
他の人に聞こえないようにそう呟くと一喜はラペルズにロゲインした…。

.....

「いやあ、よく来てくれた！ちょうど困ってたところなんだ。」
NPCの上級教官ランスロットのクエストを全て終え、修練者の島を晴れて卒業と思いきや、転職試験の課題を与えたOBトリスタンから救援要請があるということなのでルナは熱砂の海岸までやって来たのだ。

「彼処にいるワームピラニアが凶暴でね。修練者達を襲うんだよ。」
トリスタンの話を聞いてルナはびくつと肩を震わせた。まさか前のアナテーマみたいなのが…

（そんなわけないよね。うん、ないない。）
ルナはそう割り切り話の続きを聞く。

「そこで、君にもワームピラニア退治に協力してもらいたい。すぐ近くの熱砂の海岸でうろついているから。」

「おーけー。任せてちょうだい！」

「ああでも。そいつらは他のモンスターとちよつと違うから注意して。」

「ワームピラニアか…一体どんなモンスター何だろ…。」
ルナはそんなことをぼやきながら熱砂の海岸を歩く。すると砂浜のど真ん中に一匹のモンスターがいる。「?…あれは…。」
紫色の鱗で覆われた体に閉じっぱなしのギョロメ。その体は赤く長いヒレを翼のように動かすことによって宙に浮いてた。

そのモンスターこそがワームピラニア。名前は白色で表記されていた。

（そっか。これがトリスタンの言ってたワームピラニアなんだ）

すことが出来たらしい。ルナはO Bトリスタンのいる小屋の前に座り込んでいた。オルニトが使えなくなってしまう、結局徒歩で戻ってきたのだ。

「うー、疲れた。」

しかしルナがこう大きくため息をつく時だった。

「ルナ！ルナ……！！！」

どこからかルナを呼ぶ声がした。横からヴィヴィがルナの前へ飛び込んできた。

「あ、あんた……。」

「お、ここにいたか！大変だルナ！！赤ネームのモンスターが現れた！！！」

「…それで？何？」

えっといわんばかりの顔をするヴィヴィ。ルナはぶいとそっぽを向いた。

「同じこと言わせないでよ。アタシは勇士にならないって！」

「そんなこと言わずに！ルナしかいないんだよ。あのモンスターを倒せるのは！！！」

「そんなこと言ったって…。別にリアルにモンスターが出るわけじゃないでしょ。だったらほっといてもいいじゃん。」

「よくない！！リアルにも赤ネームのモンスターの影響は間違いなく出てるんだ。ほっとくとリアルにまで混沌と破滅の危機が！！！」

「そんなの全然感じないよ？」

ルナは懲りないヴィヴィに対し少々あきれ気味だった。しかしここでヴィヴィは真剣な表情になる。

「本当にそうか？ルナ、テレビを見てみる。そうすればオイラの言ったことを信じざるを得なくなるぞ？」

「な、何でこんな時にテレビなのよ！？」

「いいから！！！！！」

ヴィヴィにそう促され、ルナは渋々少しの間パソコンから離れた…

一喜はパソコンから離れるとリビングへ移動し、置いてあるテレビを付けた。
するとそこに写ったのは…

「きゃあああ！」

テレビの中で主婦が悲鳴を上げる。魚屋の店主もわけが分からずパニック状態になっていた。飾ってあった水槽の魚が異常なことになっている。魚の体から血の泡が染みだし、ぶくぶくと音をたてている。やがて魚の体は細くなり、最後は骨だけになった。画面は急にニュースキャスターの映像に変わった。アナウンサーがさっきの魚の映像の感想を述べている。

一喜は絶句し、テレビの前に立ち尽くしていた。ニュースに取り上げられた水族館や生物室で飼っていた金魚のはなこと全く同じ現象がまた起こっていた。

一喜は血相を変えて大急ぎで部屋に戻り、パソコンに向き直った。

「どうだよ？」

すかさずヴィヴィが尋ねてくる。

「し、信じらんない…。お魚がまた…。」

「ルナ、よく聞くんた。それは怪奇現象でも何でもない。ラペルズの世界に現れた赤ネームのモンスターの仕業なんだ。」

「赤ネームのモンスター？」

ルナは一度戦った赤ネームのアナテーマを思い浮かべた。そういえば、あのアナテーマが暴れている時、リアルでは何があっただろうか。

確か、東京都内で通り魔が多発していた。今はもうなくなったこと

だが…

(あれ？今はもう…ない？)

思えば、通り魔が現れなくなった直前にラペルズで…

「じ、じゃあ…少し前に都内で頻繁に出てきた通り魔の犯人って…」

「アンタの考えてる通り、戦って倒した赤ネームのアナテーマだよ。」

ルナは驚きのあまり声が出なかった。

「これで分かったら？そうやってモンスター達はリアルでラペルズ、二つの世界を壊そうとしてるんだ。」

ヴィヴィは静かに語るように話す。驚愕の事実を知ったルナは思わずうつ向き。

「そんなモンスター共を止めるには、勇士の力が必要だ。ルナ、今それが出来るのはアンタしかいないんだ！」

ヴィヴィは真つ直ぐルナの顔を見つめた。

しばらくルナは俯いたままでヴィヴィの顔をろくに見なかった。だが決心がついたのか、ルナは無言ですつと立ち上がった。

「ヴィヴィ。」

ルナは真つ直ぐ前を見据える。ヴィヴィは耳をぴくりと動かす。

「赤ネームのモンスター、今いるんだよね。どこにいるの？」

「ル、ルナ…。」

「これ以上リアルで大騒ぎを起こすわけにいかない！これ以上ラペルズをプレイする皆を怖がらせるわけにいかない！！アタシに出来ることがあるなら、アタシはそれをやる！」

「ルナ……。」

ようやくやる気になってくれたルナを見てヴィヴィ赤い瞳が潤む。

思わず泣きそうになったのだろう。だがヴィヴィはぶるぶると頭を振り、ルナを見上げた。

「そうこなくちな！ついてきてくれ！！」
ルナはヴィヴィの後に続いて走った。

ついて行った先に辿り着いたのは熱砂の海岸。修練者の島の中でもレベルの高いワームピラニアがいる。そこに一匹の凶暴なモンスターが海岸中を暴れ回っていた。見た目は同じワームピラニア。でもその大きさは何倍もある。

モンスターの頭上には赤い文字で親分ワームピラニアと表記されていた。

「あのモンスターがリアルでお魚を……」

「そうだ。さあルナ、勇士ナイトに！」

「よっっし！！」

ルナはソウルストーンを手に取って掲げる。

「……………」

「……………おい、どうした。早く変身しろ。」

「……………えっと、何て言えばよかつたんだっけ。」

ルナが振り向くと同時にヴィヴィはすっこけた。

「おい……さっきまでのあの感動はなんだったんだよ……いいか？」

ジョブチェンジ オン ライトだ。忘れんな！！」

「おーけーおーけー。じゃ気を取り直して」

ルナはもう一度ソウルストーンを掲げ、叫んだ。

「ジョブチェンジ オン ライト！！！！！！！！！！」

ルナの身体を眩い光が包み込む。武器と防具が変化し、光と希望を司る勇士ナイトにジョブチェンジした。

ルナは剣と盾を握り、親分ワームピラニアのところへ突っ込んだ。

親分ワームピラニアもルナに気付いたらしい。ルナのところへ突進

し、攻撃をしようとヒレを振ってきた。

ルナはそれを屈んで避け、剣を振った。剣の刃は親分ワームピラニアの腹部に当たったが、鱗に覆われていることもあり一発では決まらない。

もう一度剣を振ってダメージを与えようとした時だった。

ドスン！！と音をたて親分ワームピラニアはルナに頭突きをしてきた。

「きゃあ！！！」

ルナは頭突きの衝撃で跳ねとばされ、砂浜の上に転がる。

「ルナ！！！」

ヴィヴィは慌てて体勢をくずし転倒したルナのところへ駆けつけた。

「大丈夫か！？」

「うん、なんとか。」

しかしそんなルナとヴィヴィに襲いかかろうと親分ワームピラニアが猛スピードで迫ってくる。しかも立ち上がる余裕もない状態だった。ルナはがむしゃらに持つ盾を迫ってくる親分ワームピラニアにつきつけた。ルナの銀色に輝く盾と親分ワームピラニアの大きな体が激突する。ルナは親分ワームピラニアの押してくる力に押しきれつつ、必死で自分とヴィヴィの身をガードしようとした。

（なんて力…でも、ここで力を抜いちゃいけない！！でも、もっと力が！もう少しだけ力が！）

頭の中でそう念じたときだった。盾に光のオーラが立ちこめ、親分ワームピラニアを押し出す力を強くした。

「ルナ！！この状態でナイトのもう一つの技を使うんだ！！」

ルナの足元で身を守っていたヴィヴィが叫ぶ。

「もう一つの技！？」

「そう！！シールドストライクだ！！」

「わかった！！！」

ルナは盾に一層力を込めた。盾にまとわりつくオーラが更に色濃くなる。

「シールドストライク!!!」

すると、親分ワームピラニアがルナの盾の力で吹き飛んだ。体を砂浜に打ちつけ、体をびくびくと震わせる。

「ルナ、今のうちにトドメを刺すんだ!!!」

「え!?!」

ヴィヴィに呼びかけられ、ルナはがばつと身を起こす。

「アイツはシールドストライクの衝撃でしばらく動けないんだ。その間に早く!!!」

ルナは頷くと剣を握りしめ、真っ直ぐと親分ワームピラニアを見据える。そして剣に集中し、周りにはオーラが集まる。ルナは光の剣を縦横それぞれに振り、親分ワームピラニアに叩き付けた。

「ホーリークロス!!!!!!!」

剣の軌跡から光の十字が現れ、親分ワームピラニアの体を貫いた。親分ワームピラニアの体から光の閃光が溢れ、一気に爆発する。こうして赤ネームの親分ワームピラニアは木っ端微塵に消え飛んだ。その直後にモンスターを倒したルナの身体が光に包まれ、変身する前のルナに戻った。

「ルナ!!!!!!」

海に向かって立つルナの元へヴィヴィが駆けつけた。ヴィヴィはもうあとわずかで沈んでしまう夕日を見つめるルナを見上げた。

もう一度ヴィヴィが声をかけようと口を開けた時だった。

「ヴィヴィ。」

ルナが何の前触れもなく口を開いた。な、なんだいと聞き返すヴィヴィ。

「アタシ、やっとこのラペルズとリアルが危ないんだってことを理解出来た。だからやる。またあんなモンスターが現れたら勇士ナイトになって戦う。それで少しでも世界を平和に導けるなら、アタシはやる!!!」

振り向いたときのルナの表情は、どこか清清しかった。

「ルナ……。」

ヴィヴィの瞳が再び潤む。

「でも、これだけは忘れないで！！アタシはあくまでも、勇士として戦うためにラペやってるんじゃないからね！！！！」

「わ、分かってるよ。そりゃ十分に理解してるさ。」

「あはは。じゃあ改めてよろしく、ヴィヴィ！！」

ルナは笑顔でヴィヴィを両手で抱き上げる。

「ああ。頼んだぞ、ルナ！！」

真っ赤な夕日が熱砂の海岸の向こうの水平線へ消えていった…。

ACT2：倒セルナ！ラベルズとリアルで暴れるモンスター！！（後書き）

Rappelz『名の無き七勇士』プチ用語解説！？

オルト：騎乗用に使われる生き物。長距離を移動するのに便利だが、使用期限が過ぎると消えてしまう。

修練者の島：Rappelzを初めてプレイする時に誰もがやってくる島。このゲームのチュートリアル（説明）的存在。

ファイター：デーヴァ族の戦士系1次職業。武器攻撃や盾での防御を中心としたスキルを多く持つ。

ACT3：笑い地獄の町。新たな勇士ブリスト登場！（前書き）

ラペルズの世界でヴィヴィに会い、ナイトにジョブチェンジ出来るようになったルナ。しかしルナは勇士になる気など全然なかった。ところがリアルで起きた怪事件を目の当たりにし、リアルの事件とラペルズに現れる赤ネームのモンスターとの関係を知ったルナは、これからは何かあった時には勇士になってモンスターを倒すことを決めたのだった…。

ACT3：笑い地獄の町。新たなる勇士プリースト登場！

「一喜！」

ロツカーから次の授業で使う生物のテキストとノートを取り出す一喜のところへ麻美と他数名がやって来た。

「麻美ちゃん、佳代ちゃん、鏡子ちゃん！」

一喜はやって来た友人の名前をそれぞれ呼ぶ。そこで佳代がある話題を持ち込んだ。

「ねえ一喜。今日、あれ見るでしょ？」

「？…何？あれって…。」

「ええ〜！？一喜知らないの？」

一喜の返答に驚く麻美達三人。あまりにも驚かれたので一喜もわたわたする。

「『ビッグ・ダイナマイト・ラフ』。今最高に面白いお笑い番組よ。」

麻美がこう解説してへえと頷く一喜。お笑いは嫌いではない。むしろ好きな方だ。しかし、番組の名前を聞いた途端、一喜は何か妙なものを感じた。

「一喜。一回でも見とくべきよ。何だって今日のゲストはあのLUNAだし！」

「えええええ！？LUNAが出るのー！ー！？」

さっきまで感じた妙なものを忘れるぐらいの勢いで一喜は目を輝かせる。

「見る！見る！！ぜーったい見る！！！！」

一喜が半ば興奮してはしゃいでいるその時…

ドシッ

「わああ！！！！」

一喜は突然誰かとぶつかった。一喜とぶつかったその人物は派手に転がる。

転んだ人物は男子生徒だった。整った髪はベージュに近い色で度が入った眼鏡をかけている。体のラインはとても細く、どこか弱弱しそうだ。

「あの…」

一喜が声をかけた途端、男子生徒はハッと顔色を変え、急いで立ち上がると大げさに頭を下げた。

「ご、ごめんなさい。ごめんなさい！」

謝罪の言葉を連呼し、男子生徒はペコペコと頭を下げる。

「あ、いや、こっちこそごめんね。」

一喜も男子生徒の勢いに押されつつも謝る。が、

「本当にごめんなさい。失礼します。」

男子生徒はそう言うで一喜の横を通り過ぎ、そのまま走り去ってしまった。

(何もあんなに謝ることないのに…)

一喜はそう思いつつ走り去る男子生徒を見送ると足元に何か落ちているのに気付いた。

「ん……これって…」

一喜の足元にはノートが落ちていた。一喜はそれを拾い上げる。

「一喜……!!大丈夫?」

麻美達が立ち上がった一喜に声をかける。

「え?…あ、全然大丈夫。」

一喜は拾ったノートを脇に挟んだ。その直後に授業のチャイムが鳴り出す。

「わ、時間だ!」

「もう!一喜急ぐわよ!」

こうして一喜達は大急ぎで走って生物室へ向かった。

授業が始まって数分がたった。生物室では教師の谷中が黒板に何や

ら植物のことに關して板書をし、生徒達がそれをノートやルーブリフに書き写していく。

ふと一喜は廊下で男子生徒とぶつかった際に拾ったノートをマジマジと見た。どうやら物理の授業のノートみたいだ。そのノートには、ミスシマ ユタカ水嶋豊と名前が書かれてある。

水嶋 豊という少年は、一喜のクラスメートで成績はかなり優秀だ。勉強はもちろん、体育でもそこそこのいい評価を得ている。

一喜はそんな優等生の書くノートが気になりだした。そして他の生徒に見られないようこっそりノートのページを開いた。ページには一喜の知らない物理の計算式や重要事項などがびっしりと埋めつくされている。一喜はそんなページを見ただけでめまいを感じそうになった。しかしパラパラとページをめくっていく内にあるものを見つけた。

「これ…写真？」

ノートの最後のページの隅に何やら写真のようなものが貼られていた。

写真に写っていたのは、リアルには…少なくとも日本には到底いない色とりどりの服を着た青い髪とピカピカの白い鎧を着た金髪の男性だ。

(…あれ？これってひょっとして…。)

一喜はその写真をよく眺めた。そう、この写真のような人がいる世界を一喜は知っている。

(そうか…この人もラペやってるんだ。)

一喜はこのノートの持ち主に少し親近感を抱いた。

今日は生物の授業が終わると昼休みだ。生徒達は近くにあった机をくつつけて大きい四角にしてお弁当を開いたり、購買で買ったパンを持って外に行ったりと、学校内で思い思いの時間を過ごす。

一喜は机の中から拾ったノートを引っ張り出し、周囲をぐるりと見渡した。肝心のノートの持ち主は教室にいないようだ。一喜は廊下

に出て他のクラスの教室を覗いた。どのクラスを覗いてもノートを拾う前にぶつかつた男子生徒はいない。

図書室や自習室や保健室など、昼休みにも生徒がいそうな所を探し回った。しかしどこにもいない。一喜は残った屋上へ上った。

学校の屋上の空はとても近くてすがすがしく、フェンスの下では殿羽町の町並を見下ろすことが出来る。屋上へ出て少し離れたところにベンチがあり、そこに一人の少年が座っていた。

その少年こそ一喜が廊下でぶつかつた男子生徒だった。ただ黙ってサンドイッチを食しているその後ろ姿はどこか淋しそうだ。

「あのー…水嶋…豊くん？」

一喜はベンチの後ろからそつと声をかけた。すると豊と呼ばれた少年はがばつと背後を振り返り、驚いてサンドイッチを取り落としそうになった。

「あ、びつくりした？ごめんね。あのさ…」

一喜はベンチの正面に回る。

「これ、豊くんでしょ？」

拾ったノートを豊に見せる。豊は目をパチクリさせ、そのノートを受け取った。

「……有り難うございます。」

そついうとノートを膝の上に置き、サンドイッチをまた食べようとする。一喜は少し距離をおいて同じベンチに腰掛けた。

「ね、豊くんもさ…」

「……？」

「ラペやってるの？」

「……。」

豊は困惑した顔でうつ向き、ゆっくりと口を開けた。

「…見たんですか？ノート。」

「え…あ、あ、いや。ごめんごめん！そついうつもりじゃなくて…。」

ノートを覗いてしまったことがばれ、一喜は慌てて言い訳しようとする。

する。だが豊はそんな一喜を責めようとしなかった。そればかりか…
「やってますよ、ラペ。」

「へ?」

一喜の問いに律儀に答えた。一喜は目を輝かせて身を乗り出す。
「そうなの!? 実はアタシも最近始めたばかりなんだ! ねね、あの写真ってやっぱり豊くんがラペやっているとときの写真でしょ?」

豊は静かに目をそらすと、食べ終わったプラスチックの箱をしまう。
「…ええ、そうですよ。」

「やっぱり! あれ、デーヴァ族だね。アタシのもそうなんだ。」

「そうですか…。」

箱をカバンにしまうと豊はすくっと立ち上がった。

「あ、あれ? もう行くの??」

「ええ。これからちよつと…。あ。ノート、本当に有難うございました。」

豊はカバンを肩にかけると足早に階段を下りていった。その時の豊の表情は、どこか寂しそうだった。

「豊くん…。」

一喜は思った。あの表情を見ると何だか自分まで寂しくなってくる。屋上の階段棟の時計が1時を指していた。

「やばッ! 授業行かなきゃ!」

一喜は早足で階段を駆け下りた。しかしその途中、一喜はあることに気がついた。

「ていうか!!! ノートならいちいち探さないで机の中に入れとかかすればよかったんじゃない!! あゝもう!!! アタシのバカバカ!!!」

下校して帰宅し、いつになく宿題を猛スピードで終えて夕飯を取ったときには夜の8時になっていた。しかし一喜はこの時を待っていた。

「ママー!!! テレビテレビ!!! 『ビッグ・ダイナマイト・ラフ』

が始まるんだから！」

ところが一喜の母美津子はテレビを貸そうとしない。

「何言ってるの。貴方今日は『懐かしの映画ロードショー』を見るんじゃないかったの？」

「え…：そうだったっけ??」

「そうだったっけじゃなくて一喜が見たいって言ったんでしょ? LUNAのデビュー作だからって言って。」

「…：うう、見たい。」

ことは今から1週間前。一喜は『懐かしの映画ロードショー』の次週予告でLUNAが出てきたのを見て興奮し、美津子に来週は絶対に見たいとせがんだのだ。そこで美津子は夕飯前までに今日まで出された宿題を全て片付けることを条件として出した。

だから一喜は昨日に山積みになってた宿題を片付けたわけだ。

「ううん、なんて選択肢なの。アタシの見たい番組にはどっちもLUNAがいる。お笑いのゲストのLUNAも見たいけど、デビュー当時のLUNAも貴重だ…：ううん…：。」

「片方は録画しておけばいいじゃない。」

美津子は呆れてそう呟く。その呟きは一喜にはすっかり聞こえた。

「そっか！それならどっちも見れるね!…：でも今日はどっちを見ようか…：ううん…：。」

ふとテーブルに視線を写すと、テーブルの隅には何故か10円玉が一喜はそれを手に取った。

「よ…っし!…！今日のテレビの命運はこれに任せるぞ!表が出たら『懐かしの映画ロードショー』。裏が出たら『ビッグ・ダイナマイト・ラフ』ね!それ!…!!」

一喜は勢いよく10円玉を弾き飛ばした。ところが弾かれた10円玉は床をバウンドし、テレビと床の隙間を通り、テレビの裏側へ行ってしまった。

「あああ!アタシのテレビの命運が…!!」

二つの番組が始まる中、一喜は弾き飛ばした10円玉を必死にすく

いあげるしかなかった…。

10円玉の命運により、『ビッグ・ダイナマイト・ラフ』は美津子のおかげで無事録画された。

翌朝になって一喜はご機嫌な様子で駅までの道を歩く。一喜の歩く向こう側から二人の小学生の男の子と女の子が声を上げて笑いながら歩いてきた。

「面白かったねえ。」

「うん！笑いが止まらないよ！」

なんてことを言いながら小学生二人は一喜とすれ違った。微笑ましい光景だと一喜は素朴に感じた。駅に一番近い交差点にさしかかり青信号になるのを待っている間、一喜の後ろを自転車に乗った女性が通り過ぎていった。女性は自転車に乗りながら一人で笑っていた。駅のホームに行く間にも、一喜は何人か笑っている人達とすれ違った。その内に一喜は妙だと思った。

(皆、何がおかしくて笑ってるの…??)

その疑問は電車に乗って殿羽町に行く間に更にエスカレーターした。普段は静かで少々混雑している電車の中なのに、あちこちから大きな笑い声が聞こえた。座席に座っているサラリーマンが一人で腹をかかえて笑っている。手すりに片手を添える老夫婦も始終笑いつばなしだった。一喜の隣で立っている私服の女性も、目に涙を浮かべてひとりで大笑いしている。一喜のように特に笑うことがなく普通なのはごく少数のようだった。

殿羽駅から降りて学校へ行く間も一喜は意味もなく笑っている人達をたくさん見かけた。

一喜の通う殿羽高校も笑い声で普段より一層騒がしかった。笑わずに普通に登校している生徒達も、一喜のように不思議そうな面持ちで笑いつばなしの生徒達を見る。

「おはよ〜!!!」

一喜は自分のクラスの教室のドアを引つ張った。しかしその瞬間、教室の中からどつと笑い声が響いてきた。そして一喜は教室のその光景に目を瞪る。

クラスの大半の生徒達が大笑いしていたのだ。友人達と談笑している者だけでなく、ロッカーに笑いながら物をしまう者もいた。

「あ、麻美ちゃん…？それに佳代ちゃんまで…。」

「え？あ、あーははははははははははは！おはよう一喜！！！！あははははははははははは！」

「ちょ、ちよつと麻美ちゃん！？」

一喜は血相を変えて麻美の両肩をつかんでひっきりなしに揺らす。それでも麻美はただ笑っていた。

「一喜ー！！一喜は大丈夫だったのね！！！」

友人の鏡子が半泣きになりながら一喜のところへやってきた。どうやら鏡子も笑わず普通でいられるようだ。

「鏡子ちゃんも？よかつたあ…。」

一喜は心からほつとすると机にくたりと上半身を伏せた。

「本当よ。一喜まであんなつたらどうしようかと思つたもの…。」

今にも本当に泣き出しそうな鏡子をよそに、麻美と佳代は相変わらず笑い続けている。

「うん…いやあ、皆笑ってるけどなんか不気味な光景だね！。」

どこを見ても意味もなく笑っている生徒ばかりだ。一喜や鏡子のように平静なクラスメイトは全体の4分の1程度だった。その中には昨日拾ったノートを持ち主である豊もいた。彼は笑いもせず机に座って静かに本を読んでいる。

教室中にチャイムが鳴り響く。これからホームルームが始まろうとしている。

（先生は教師なんだからさすがに笑ってるなんてことは…。）

しかしそんな一喜の期待はあつというまに崩れた。

教壇に近いドアから担任の赤西が入ってきたが、どこか様子がおかしかつた。顔は赤くなっている上、目はやけににやけている。口を

「鏡子ちゃん、それどういうこと？」

「今日の朝にもう一度だけ佳代に電話したの。そしたら佳代、電話に出た時からあんな感じで…」

二人は未だ笑い続けてる麻美と佳代を見やる。

「それと、麻美に会ってからも思ったんだけど、さつきからお喋りする時もあの番組のことばかり話していて…」

一喜は目を丸くして教室をぐるりと見回した。

「ただいま。」

笑い地獄の学校から解放されて安堵の息を漏らせる…と思っていた。しかし一喜はなんだか嫌な予感を感じたのだ。

今日は家にいるはずの美都子。ただいまと言えばおかえりとすぐ返してくれるのに、一喜の言葉が響くだけで辺りはしんとしていた。玄関には母のものと思われる靴があったから家にいないということはないだろう。

一喜はリビングに続くドアをそっと開けた。すると……

「はは…あははははははは！」

そこには目に涙を浮かべて笑いながらお裁縫をする母美都子がいた。…ま…ママ！ママちよつと！どうしちゃったの！？ねえママ！「あはははは…一喜…ごめんね…ママね…一喜がいない間に見ちゃったのよ…ははは。」

「見たって…何を？」

「『ビッグダイナマイトラフ』よ…はははははは…一喜、録画しちゃったじゃない…でも…うふふふ…面白いわねえ…その番組…ははは…あははははははは！」

一喜の顔色がみるみるうちに変わる。自分の嫌な予感はどこでも当たってしまった。

「そうだわ…あはは…一喜も…見てみなさいよ…あはははははははは！」

「い、いい…見ない…ていうか…消して！」

一喜は声を震わせてそう言うともものすごい勢いで2階へかけあがった。そして自分の部屋に飛び込むように入るとボタンと音をたててドアを閉める。

「やっぱり…そうなんだ。麻美と佳代も、『ビッグ・ダイナマイト・ラフ』を見たからあんなったんだ！」

一喜は机の上に置いてあるパソコンの電源を付けた。

「これもまさか赤ネームのモンスターの仕業かな…?」

そう考えながら一喜はラペルズを起動し、ログインした…。

親分ワームピラニアとの戦いの後、修練者の島を卒業したルナはデヴァ族の町、ラクシにレポートした。

「うわあ…綺麗なところ！ていうかこれ空飛んでるよ！」

ルナは初めてみるラクシの姿に驚きっぱなしだ。空を漂うこの町には神様を思わせるような巨大な人型の石像や、まるで小さなお城のような家が立ち並んでいた。

「それにしても人が多いなあ…。」

確かに、大陸にある町の一つだけにそこには多くの冒険者が行き交う。修練者の島の時よりも桁違いの数だ。

「そうだ！それよりもヴィヴィ！ヴィヴィを探さないと！！アタシがインする時にいつつも出てくるはず…だよな？」

ルナは町中を歩き回り、あの小さな兎を探した。しかしヴィヴィはどこにも見当たらない。

「ヴィヴィ、いないなあ。一体何処いったんだろう？」

ルナはふとライトマップを広げ、自分の位置を確かめた。ここでルナはある重要な問題に気がついた。ここは…空中に浮かぶ都市、ラクシ。モンスターがこんな空高いところなどいるはずがなく、ましてや直接フィールドに出れるわけでもない。

「それじゃ…どうすればいいのよー！ー！！」

と叫びそうになった時だった。

「こんにちは。案内役のプロメスです。聞きたいことがあればなんなりどうぞ。」

わ！とルナが飛び上がった先には金髪で身なりのいいコートのようなものを着たデーヴァ族の男がいた。彼はデーヴァ族の町ラクシの案内役を勤めるNPCプロメスである。ルナはうーんと腕を組んでちらりとプロメスを見る。

「そうね、折角だからいろいろと聞いておこうかな。」

ルナはNPCのプロメスからラクシについていろいろと話を聞いた。どこに行けば鍛冶屋や雑貨屋があるか。2階に上がるあの階段は勇者の階段ということ等、これからラクシを利用する上で役に立つような立たないような内容だったとルナは思った。

「こっからフィールドに出たいんだけど、どうすればいいかな？」

「テレポーターのガブリエルとルリエルに頼めば、フィールドに飛ぶことが出来ます。ルピを払えばもっと遠いところへ行けますよ。」
「なるほど、テレポートね。」

ルナはプロメスの近くにいたテレポーターのところへ行くと、ラクシフィールドへ繋がるラクシの錨へテレポートした。

ラクシの錨の風景は、先ほどの空中都市とは打って変わってこじんまりとしていた。テレポートをするための鉄塔と、ラクシにあったような家が点々と建っている。そして北方面、西方面、そして南方面に伸びる橋を渡るとフィールドに出られるようだ。

「お、ルナ！！！！」

鉄塔の前にいるルナのところに一匹の兎がやってきた。この兎こそルナの探していたヴィヴィだ。

「あー！ヴィヴィーー！もう、探したんだよー！！！」

ルナは会うなり頬を膨らませてヴィヴィに詰め寄る。

「いやあ、だって。一応オイラはムーンラビットっていう攻撃しないけどモンスターの仲間みたいなもんだからさ。ラクシ本土にはい

けないわけよ。そこ分かってちょうだいな。」

「…それもそうね。」

モンスターのいない空中都市にヴィヴィのようなものでも、何かいたら大事になるだろう。

ルナは諦めたように頷く…だけではなかった。他にも何かまずいことに気がついたのだ。

「そしたらアンタ！こんな人前でしゃべったりしていいわけ！？モンスターがしゃべるなんてこともまずいよ！」

「ああ、それは心配無用。」

ヴィヴィは余裕そうな表情で耳をパタパタさせ、前足を掻く。

「オイラの声は、選ばれた名の無き七勇士にしか聞くことが出来ない設定になってるんだ。だから、オイラが普通にこうしてしゃべってる時点でも、実際オイラの言葉が聞こえるのはルナだけだ。だから…。」

ヴィヴィは意地の悪そうな顔をルナに向ける。

「アンタがそうやって叫ぶ方が、変な独り言をしゃべるみたいでかえっておかしいんだぞ。」

「げ！！！」

ルナは両手で口元を覆うと顔を赤くした。そしてヴィヴィに怨みの眼差しを向ける。

「アンター！どうしてそういうこと先に言わないの！！！！！！」

「うあああ！！！わかったわかった！それよりルナ！さっきまで慌ててたろ！何があっただんだよ！」

「は、そうだった！！」

ルナはヴィヴィの首根っこを掴み、ゆさゆさと揺らす手を離れた。

「聞いてヴィヴィ！アタシ達の町で大変なことが起きてるの！！！！ルナはリアルで今起こっていることをこと細かくヴィヴィに話した。話を聞くにつれ、ヴィヴィの表情も真剣なものに変わっていく。

「ねえ、これってやつぱり…。」

「間違いない。赤ネームのモンスターがやってることだ。」

「やっぱり！じゃあきつとどこかで暴れてるよね。早く倒しに行こうよ！！」

ルナは立ち上がり、剣を手にとって気合十分だ。しかし…

「待て！リアルで異変が起きたその時点でモンスターが現れるとは限らない！！」

「ええええ！？何で！！？早く倒さないと麻美達が笑い死にしちゃうかもしんないのに！！」

しかしヴィヴィは首をゆっくりと振った。

「今ここで急いでがむしゃらに探したところで時間の無駄になるだけだ。モンスター探して余計な体力を使っちゃいけない。」

「で、でも…。」

「ルナ、ソウルストーンだ。ソウルストーンを持つてるルナなら、赤ネームのモンスターが現れた時に反応を知ることが出来る。」

「え…これが??」

ルナは黄色のソウルストーンを手を持つ。今のソウルストーンは輝くことのないただの黄色い石ころのように見えた。

「だからそれまではまったりとプレイしてればいいさ。オイラだって何かあつたら知らせる。」

「うん…。」

ルナが渋々頷く時だった。

「バイタリティブレス！」

何処からか呪文を唱える声が聞こえ、ルナの周りに青い光が現れた。「え……?」

ルナは突然魔法を受けたためか少々戸惑っている。ふと見ると一人のデーヴァ族の男がいた。

ルナと同じくデーヴァ族だが、髪は金髪でなく明るい蒼髪で、短く整っている。服はルナが着ているものよりちょっと高そうな柔らかく白い服で手には細めのメイスが握られている。そして顔立ちは屈強な男とはちょっと離れていて少し可愛らしい。

ルナがあまりにも戸惑っているので男は小首を傾げるとこちらに近

づいてきた。

「あ、すみません。僕のバフ、お気に召しませんでした?」

「え…あ、いやいやいや。ありがとございます!ホントに!!!」
とっさにそんなことを言ってしまったルナは、何を自分は適当なことを言っているんだろうと思った。そんなことをよそに、男はふわりと笑顔を浮かべる。

「よかった。それじゃ、僕はここで。」

「あ、はい!」

男はそういうと、南方面のフィールドへ歩いていった。

「ねえヴィヴィ。バフって何?」

ルナは男がいつてしまうなり、こそこそとヴィヴィに尋ねる。

「スキルには、ダメージを与えるものの他に攻撃力や防御力を上げたりすることの出来る補助スキルっていうのもあるんだ。それを人はバフって呼んだりするんだ。」

「なるほどね。それにしても…。」

ルナは南のフィールドを繋ぐ橋を眺める。

「さっきの人、どつかで見たことあるような気がする…。」

その時だった。ルナのソウルストーンから黄色い光が点滅しだした。ヴィヴィがそれを見て耳をピンと立てる。

「あれ?ソウルストーンが何か反応してるみたい。」

「ルナ!この反応は赤ネームのモンスターの反応だ!!!」

「な、何ですって!!!?」

ルナはソウルストーンを握りしめて錨じゆうをきよるきよると見渡す。

「ルナ!ミニマップだ。ソウルストーンを持つアンタのミニマップを見れば、どこに赤ネームのモンスターが現れたかわかるぞ!!!」

「ミニマップね?」

ルナは表示されているミニマップを調べた。自分の周囲の地図が一瞬で浮かび上がった。南へ行ったところに赤いものが点滅している。「どうだ?わかるか??」

「こつち……!!」
ルナはミニマップを頼りにフィールドを飛び出し、南へまっすぐ進んでいった。

その頃ラクシフィールドより南の伐採所では…

「……!?!」

ちょうど伐採所にやってきたデーヴァ族の男がわらの束の前で倒れている女性を見つけた。

女性はぐったりして起きて上がるそぶりも見せない。

「ひどい……。」

男は女性の額に手をそつと当てるとこう呟く。その時、倒れている女性が一言だけゆっくりとしゃべった。

「ファニーマスクに…気を付けて…。」

女性はその次の瞬間、瞬く間に消えてしまった。伐採所へ入って更に南下していった男は、今までにないような光景を目撃した。

伐採所で狩りをしてきた人々があちらこちらで倒れている。

人だけでなく、伐採所に生息しているモンスターまでぐったりとしている。

「どういうことだ…? 一体誰がこんなことを…。」

男はしゃがんでHPゲージが空になっているモンスターを覗き込む。その時……

1匹のモンスターがゆっくりと男に近付いてくる。モンスターは2本足で体は真っ白でぼてぼてしていて腹巻きをしている。肝心の顔はヘンテコな顔のマスクをかぶっているためよく見えない。

男がモンスターに気付き、顔をあげたところでモンスターは手を振り上げた。しかし、

「そこまでよ……!!」

モンスターは手を止め、ジョブチェンジしてナイトになったルナとヴィヴィを見やる。

「アイツは…ファニーマスクだ!」

「リアルで訳もなく皆が大笑いしているのはソイツのせいね！」
男を襲おうとした赤ネームのモンスター、ファニーマスクは身構えるとルナのところへ向かっていった。

「あ、危ない！」

難を逃れた男が声を上げる。ルナはファニーマスクの拳を交わし、盾をファニーマスクの腹に押し付けた。

「シールドストライク！」

ファニーマスクがその衝撃で腹をかかえる。

「よっっし！一気に決めるわ！ホーリー……！」

しかしそれは男の上げた声によって中断された。

「な……！」

シールドストライクで怯んだフリをしていたファニーマスクが突然男を捕まえたのだ。男はファニーマスクの腕によって束縛されている。

そこでルナは男の顔を見て気付いた。彼は、フィールドに出る前にバフをかけてくれたデーヴァ族の男性であることを……。

『ヒヒヒ……お前が名の無き七勇士か。』

突然ファニーマスクがしゃがれた声で喋り始めた。

「ちょ！ヴィヴィー！！あのモンスター、言葉を話すよ！？」

「うーん、奴が人型のモンスターだからじゃないか？」

「人型のモンスター？」

「ああ。ファニーマスクの元は雪男族だ。2本足で立つのは人型族が多いからな。」

『ごちゃごちゃうつせーな！！』

ファニーマスクは手に付いている短く鋭利な指を男の首に押し付ける。

『さあ！この坊主が欲しけりやお前らの持つソウルストーンをよこしな！！』

「な、何だつて！？」

ルナとヴィヴィは勿論反論する。

「ぶざけるな！ソウルストーンはアンタに渡すようなものじゃない

「!!」

「そうよ！それに人質を取るなんて卑怯じゃない!!」

『長くはまたねえぜ。』

男の首筋にとがったファニーマスクの指が近付く。

「くっ……」

ルナは唇をかみしめ、ただファニーマスクを睨む。その様子を見てファニーマスクが愉快そうに笑う。

『さあ、とつとソウルストーンを渡してもらおうか?』

ルナが睨みながらゆっくりとファニーマスクの所へ踏み出た時だった。

「駄目!!!」

人質になった男が叫んだ。

「え……?」

ルナは目を丸くして男を見る。

「何があってもそれだけは駄目です！何のことだか僕にはよく分かりませんが、渡してしまうとどんなことになるか分かるでしょう!!」

「で、でもそしたら君が……」

ルナが躊躇うのに対し、男は安心させるように笑顔を向ける。

「僕のことなら気にしないで下さい。今ここでしなければいけないのは、このモンスターを倒すことでしょう?」

『長くは待たねーって言うてんだろ！マジで首かっきるぞ!!』

ファニーマスクは男を拘束する腕の力を強くした。胸ぐらを圧迫され、男の顔が苦痛で歪んだ。

まさにその瞬間。なんと男の身体から溢れる程の青い光が現れた。ルナとファニーマスクもその光景に思わず目を見張る。ファニーマスクがそこで隙を見せた時だった。ヴィヴィが素早く飛び出し、男を抑える腕に力いっぱい噛みつく。

そしてファニーマスクがいてー！と叫ぶ内に男を解放した。

「てやー！ー!!!」

サフィラスは変化した青い槍をファニーマスクに向かって投げた。槍は真つ直ぐファニーマスクの方へ飛んでいく。

『ぐ、ぐぎゃあああああ!!!!!』

ファニーマスクは逃げようとしたが避けきれず、槍は体を貫通した。そして耳につんざく大声を上げると体が爆発し、あとかたも残さず消えた。

ルナとサフィラスの体をオーラが包み、二人は変身前の姿に戻った……。

「それにしても、ここでもう一人勇士の仲間が出てくるなんて。」

「ああ。ルナに比べて頼もしそうだしな。」

「な、何ですってー!!!」

ルナはヴィヴィを掴み上げ、耳や顔を引っ張ったりする。

「兎に角、これから一緒に悪さをする赤ネームのモンスターを倒そう！宜しくね、サフィラス君！」

ルナは笑顔で手を差し出す。サフィラスは少しの間きよんととしていたが、やがてその手を取った。

「宜しく願います、ルナさん。」

その様子をヴィヴィが少し離れて微笑ましそうに見ていた。

ACT3：笑い地獄の町。新たな勇士プリースト登場！（後書き）

Rappelz 『名の無き七勇士』 プチ用語解説!？

ラクシ：デーヴァ族の多く住む町。外敵の侵入を防ぐため、空中にあげられている。

ミニマップ：ユーザー個人の現在地の大まかな周囲が常に確認できる。

レポート：町から町への移動手段の一つ。徒歩で行くにはあまりにも離れているため、お金を払うことにより、指定された場所まで瞬間移動することが可能。

ACT 4：ルナとサフィラス。相性バツチリペア？（前書き）

リアルでお笑い番組『ビッグ・ダイナマイト・ラフ』を見た者がずっと笑い続けるという奇妙な事件が起こっている中、ラペルズの世界でルナは赤ネームのモンスター、ファニーマスクに人質にされたサフィラスというデーヴァ族の男に会う。男はなんと、名の無き七勇士の一人、プリーストだった。プリーストにジョブチェンジしたサフィラスの力を借り、二人はファニーマスクを何とか倒すのだ…。

ACT4：ルナとサフィラス。相性バッチリペア？

ここはラクシの錨。

青白い光を放つ鉄塔の前にルナは一人佇んでいる。近くの多くのモンスターと戦い、HPをためるために座って休憩をしているのだ。つた。

そこへ何処からかムーンラビットのヴィヴィがやって来た。

「よおルナ。昼間からログインするなんて珍しいな。」

ヴィヴィに声をかけられ、ルナは振り向くとえっへんと言わんばかりの顔で立ち上がり、手を腰に当てる。

「今日、リアルでは日曜日だからね。こうしてしっかり修行してアタシ自身のレベルも上げない！」

「おお！ルナ、やっとオイラの言うことを理解してくれたか……」

ヴィヴィは感激して一瞬ほろりと来そうになったが、直ぐに表情をコロリと戻す。

「まあそれは誉めよう。だがそろそろその格好はどうかと思うがね。」

「え？とルナは自分の身体を見下ろす。すっかり慣れた緑と白の服に、馴染んだ片手長剣と盾が目映る。

「その武器と防具で戦うのもそろそろ限界だろ。アンタの装備も、R2のものに変える必要があるな。」

「ランクツォー？」

ルナは聞きなれない単語を思わず返す。

「お前：ちゃんと修練者の島で話聞いてたか？装備出来るアイテムにはランクつてのがあってな。あるレベルに達することが出来ないとそのランクにあったアイテムが装備出来ないわけよ。」

「え？それじゃあ今のアタシに装備出来ないものもあるの？」

「ああ。山ほどあるさ。装備出来るレベルに達してないからな。」

「むう……」

ルナはそこで難しそうな顔をして腕を組む。まだまだ自分にとって未知のアイテムが世界にわんさかとあるわけだ。

「まあそこんところは自分で考えてやるんだな。じゃ！」

「えー!?ちよつと!ヴィヴィー!」

慌てるルナをよそにヴィヴィーは何処かへ行ってしまった。

「もう全く…ホントに勇士のサポート役だと思ってるのかな。」

といなくなったヴィヴィーに不平をこぼす。

「ま、そんな微妙なヴィヴィーのアドバースだけど、騙されたと思ってR2のアイテム、装備して見よっかな!」

そう意気込むとルナは早速ラクシの町へテレポートした。

ラクシの町は相変わらず人が多い。ルナはアーチをくぐり、広場にいくつか並ぶ店を覗いた。R2のアイテムはレベル20以上の者が装備可能だが、ルナのレベルは21なので問題はなかった。持っている所持金で、ルナはウツデンヘルメットとヘビーシールドを購入した。

どっちもR2のアイテムですぐに装備することが出来た。

「いらっしやい。好きなだけ見ていつて。」

防具屋のNPCの前でルナはR2の鎧を物色していた。

が……

「むむむむ…」

装備出来るR2の鎧が19000ルピに対し、ルナの所持金は700ルピ。とても買えない状況だった。

「ねえねえ素敵なお兄さん。この鎧お安く出来ない?」

しかしNPCである防具屋にそんな話を通るはずなどなかった…。

「はあ…ラペでもお金、お金が欲しい…」

ルナはへこんだままラクシの2階のフロアをフラフラと歩く。

「どうしたら今の倍以上のお金が入るかなあ…」

なんてことをブツブツ言いながら前方を見ると見覚えのあるデーヴ

ア族の男がいる。ルナはその男を見ると喜々として駆け寄った。

「サフィラスくん！」

サフィラスと呼ばれた男はくるりと此方を向く。

「ルナさん…？」

「うん！サフィラス君もラクシに来てたんだ！」

「ええ…。倉庫の整理をしたかったので。」

同じ勇士の仲間に来てテンションがあがるのもつかの間、ルナはまた溜め息をついた。サフィラスがその姿を見て小首を傾げる。

「…どうしたんですか？何だか元気がなさそうですけど。」

「あのねサフィラス君…」

ルナは事情をサフィラスに話した。ところがサフィラスはあまり深刻そうな顔をせずにルナの話聞いていた。

「売るものだつて持つてないし…：…はあ、どうすればいいのかな…」

ルナは溜め息をついた。するとさっきまで黙って聞いていたサフィラスが口を開く。

「そういうことなら、ルナさんにぴったりのクエストがありますよ。」

「

「え？クエスト？？」

サフィラスの後についてきてやってきたのはラクシの中心にある巨大な塔だった。3人の巨大な人型の石像が、塔を作り上げる壁になつていてという替わつた形のものだった。その変わった塔の裏に一人のNPCがいる。

「彼は高位神官ラルガール。たまに報酬のいいクエストを用意することがあるんですよ。」

サフィラスが解説する横でルナがへえ〜とNPCの高位神官ラルガールを見る。

彼の頭の上にはクエストを受けることの出来る状態を示す稲妻マークがくるくる回っている。

「彼から『オーク狩り』というクエストを受けることが出来ます。」

報酬で入ってくる経験値とルピが多めなのできつといいと思いますよ。」

「ホントだ。報酬が20000ルピ！これならすぐにあの防具が買える！…なにになに？ラクシの錨の南側でオークジュニアたちが所持する部族の印60個を集めた後、ラクシの高位神官のラルガールに報告せよ…？ろ、60個も集めなきゃいけないの！？クエストアイテムを！？」

「少し手間のかかる内容ですが仕方ないでしょう。でもこのクエストの場合はレベルの低いモンスターを倒してもすぐに手に入ることが出来ますから…。」

そこでルナはポンと手を叩いた。そしてにつこりとサフィラスを見て思いがけないことを言ってきた。

「ね、サフィラス君も一緒にやらない？このクエスト。」

「え…僕ですか？」

突然の申し出にサフィラスは少し困った顔をした。

「でも、僕はそのクエストもうやりましたよ？」

「いいのいいの。一人でやるより二人でやるほうがいいでしょ？」

「ルナさん…。」

サフィラスは苦笑しながらもルナの申し出を承諾した。二人は倉庫にあるアイテムの出し入れを済ますとラクシの錨へレポートした。

「そういえばルナさん、PTって組んだことありますか？」

「ううん、無いよ。それよりパーティーって？」

「えっと…そうですね。」

パーティーを結成することによってグループを作ることが出来、クエストや経験値、ドロップアイテムもそのパーティー内で共有しあうのだ。

しかしサフィラスが目にしたのはそういう点ではなかった。そう、パーティーシステムのことをルナは全くといっていいほど知らなかったという点だ。

「失礼なこと聞いてしまっんですけど…ルナさんって、初心者ですか？」

「え？あ、そうだよ！あつたりまえじゃん！！全然失礼じゃないよ！」

あははとルナはポンとサフィラスの肩に手を置く。

結局PTはサフィラスが作成し、リーダーを取る形で出来上がった。

「うわ！いつもとちょっと違う感じだね。」

ルナは初めてのPTということで少しドキドキしながらサフィラスとラクシの錨を出発した。

今回ルナが集めなければならぬクエストアイテムは『部族の印』。ラクシ南フィールドにいるオークジュニア族が持っているらしい。

「よーっし！次はあつちだー！！」

「る、ルナさん！ちよつとペース早くないですか！？」

サフィラスはルナに引つ張られつつも、バフやヒールをかけたりにしてオークジュニアを狩るルナを援護した。そうしていくうちに、部族の印は残りあと15個になった。

「ふう…。」

ルナは近くの木の幹のところまで座り込む。サフィラスもルナに軽いヒーリングをかけるとその場で腰を下ろした。その場での沈黙が少しの間だけ続いた。

「…ねえ、サフィラス君どうしたの？ひよつとして、PTつまんない？」

「…え…？い、いいえとんでもないです！PTがあまりにも久しぶりだったもので…。」

「そうなんだ…。」

いきなりルナがそんなことを言ってきたのでサフィラスは少し動揺した。しかし、ルナとPTを組んで狩りをしている間、サフィラスの脳裏にあるビジョンが浮かんでいた。

夕暮れが近づく中、ひたすら続ける狩り。サフィラスの隣にはいつもある人物がいた。

ルナと同じファイターであろう。鎧を装備した人だ。

「おい！早く来いよー！」

「ええ！？待つてよー！ー！！！」

その人を慌てて追いかけるサフィラス。そこにはいつも自分と……あの人の笑顔が絶えなかった。

「サフィラス君？」

ルナは不思議そうにサフィラスの顔を覗き込む。するとサフィラスはハッと我に返る。

「あ、す、すみません。つい……ぼーっとしてしまいました……。」
そういうとサフィラスは立ち上がる。

「あと15個そろえばいいですね。そろそろ行きましょう。」

「う、うん……！」

ルナも立ち上がり、二人は狩りを再開した。

（サフィラス君、どうしたんだろ？なんだか少し寂しそうな顔をしてた気がする……）

モンスターの沸く原っぱへ走る中、ルナはそう考えた。

「オークジュニア！かーくごおおー！！！」

ルナはスイフトオークジュニアと表記された子鬼のようなモンスターに剣を振るう。かつて修練者の島で親分ワームピラニアを倒した報酬で手に入れたR2の剣のおかげか、ルナの方が優勢だ。しかしそんなルナ達の横から別のオークジュニアが襲い掛かってきた。

「うわ！あっちからも来た！」

襲ってきたモンスターはライアトオークジュニア。今ルナが戦っているスイフトオークジュニアよりレベルが少し高い。

「むむ…ちよつときついかも。」

そこでルナは標的をライアトオークジュニアに変更した。新しく装備した茶色の長い盾の表面をライアトオークジュニアに押し当てる。

「シールドストライク！」

するとライアトオークジュニアはひるみ、スタン状態になった。その間にルナはスイフトオークジュニアにとどめを指す。

「やった!!!」

ルナがドロップされた部族の印を拾おうとした時だった。後ろからスタン状態から立ち直ったライアトオークジュニアが迫り、棍棒を振り上げる。そしてルナにダメージを与えようとしたその時…

「エネルギービート!!!」

サファイラスが白いエネルギー弾を飛ばし、ライアトオークジュニアにダメージを与えた。ダメージを受けたモンスターは標的をサファイラスに変えて攻めかかる。だが、

「えい!!!」

ルナの一撃により、あっさりと沈んでしまった。部族の印を落とす…狩りは予想以上に順調に進み、気付けばクエストアイテムも目標数まであと1個となった。

「すっごーい!60個って言われてすぐ時間かかると思ってたけど、もうあと1個だってよ!」

ルナはもう目の前になってきた報酬のことを思い浮かべると気分が高まっていく。

「そうですね。ルナさん、あと一匹だけ狩れば…」

「うん!それじゃあささつと狩って報酬もらって新しい防具を買いぞー!」

と意気込むときだった。

『ウフフフフ……』

何処からか女性の声がする。

「……!?だ、誰!?!」

ルナとサフィラスが警戒して辺りを見回す。すると二人の前にいきなりパツと見知らぬ女性が現れた。

肌はルナやサフィラスと違って日焼けで出来たような小麦色だが、ルナと同じく金髪であるところから、デーヴァ族であることが判断出来る。

首から下全体にかかる銀色の分厚いコートを着用し、武器は何も持っていないようだ。そして肩には真っ黒な毛で覆われた小さな兎が乗っている。

「初めまして、フフフ……」

女はにやりと不気味な笑みを浮かべる。

その笑みからルナとサフィラスは妙な戦慄を覚える。

「あ、アンタ……一体何なの?」

ルナが恐る恐る女に尋ねる。すると女はまあと驚き、残念そうな顔をした。

「私を知らないの?七勇士である貴殿方なら知っていると思っただのに……」

「あ、あ……いや……その……ごめん……てちよつと待って!」

ルナが叫ぶと同時にサフィラスが一步前が出る。

「何故貴方が七勇士のことを知っているんですか?それだけではない。どうして僕らが七勇士であることも知っているんですか?」

「まあ……知っていて何が悪いの?私も貴殿方と同じようなものなのに……。まあいいわ。話を変えましょう。」

すると女は不気味な笑みを浮かべながら片腕を前に伸ばす。

「貴殿方、オークを狩っているんでしょう?私のと相手をしてみないかしら?」

すると伸ばされた女の片腕から黒く淡い光の玉が現れ、上空に放たれた。光の玉から更に光線のようなのが地面に向けて発射され、地面には黒い煙が立ち込め、魔法陣のようなのが描かれる。

「いでよ…オークウォリアー!!」

女がそう叫ぶと上空の光の玉と魔法陣が音をたてて一瞬の間に消えた。代わりに現れたのはごつてりとした黒い鎧を着用した鬼のようなモンスターだった。緑色の皮膚を持つモンスターの耳は太くとり、手には大きな鉄球を先端につけた棒が握られている。

召喚されたオークウォリアーに女はそつと命じた。

「さあ、七勇士達を、殺しなさい…。」

するとオークウォリアーの小さな目がざらりと輝き、ルナ達の前へ一歩踏み出る。

「サフィラス君!」

「ええ、僕らも本気で行くしかないですね。」

ルナとサフィラスは身構えるとソウルストーンを掲げ、叫んだ。

「ジョブチェンジ オン ライト!!!!!!!!!!!!!!」

「ジョブチェンジ オン ウォータ!!!!!!!!!!!!!!」

ルナとサフィラスはナイトとプリーストへとそれぞれジョブチェンジした。

「ナイトとプリースト…。なかなかいい組み合わせね。」

女は二人の姿を見てそうぼやく。

オークウォリアーが武器を振り上げて襲いかかる。ルナとサフィラスは攻撃を避けると左右にそれぞれ別れた。オークウォリアーは先ず最初にルナを狙ってきた。

鉄球が飛んでくるとルナは素早くかがみこんだ。ルナの頭上で鉄球がブンと音をたてて通り過ぎる。オークウォリアーがもう一度鉄球

を振りかざしてきた。ハツと気づいた時には鉄球がルナの顔面に迫ってくる。ルナはとっさに剣をかざした。

ガキイイイイイイイーン！！！！！！

幸い、致命傷は免れたが飛んできた鉄球に衝撃でルナの白い剣は弾き飛ばされ離れた地面に落ちる。自分の背後に転がる剣を取ろうかどうか迷う間にオークウォリアーの鉄球がまた飛んできた。

「シールドストライク！！！！！！」

ルナは盾に力を込め、オークウォリアーの攻撃を防いだ。しかし鉄球の威力は半端なく、相手のオークウォリアー自身がひるむこともなかった。

「くっ……！！」

さすがに盾だけではきつい。一方的に防戦となってしまう。盾を握る手にじわりと汗がにじむ。しかしそんな時だった。

「ルナさん、離れて下さい！！！！」

遠方からサフィラスの声が聞こえた。ルナは言われた通り、オークウォリアーからパツと離れる。そこへ間髪いれず……

「アイススピア！！！！！！」

サフィラスが青い氷の槍を具現化し、オークウォリアーの背に投げつけた。槍はオークウォリアーの背に見事にヒットした。ダメージを与えられたオークウォリアーはぐうと呻くと、今度はサフィラスに向かってくる。

「サフィラス君！！！！！！」

ルナは焦った。サフィラスの場合、ルナとは違って盾のような防御に使えるようなものを持っていないからだ。しかしサフィラスは……

「ルナさん！僕があのもんスタのおとりになります。その間に早く剣を！！！！！！」

ルナはハツと背後を振り返る。そこには地面に転がったままの白い剣があった。サフィラスはルナが攻撃対象にならないよう、彼女か

らますます離れながらオークウォリアーをおびき寄せる。ルナは急いで駆け寄り、白い剣を拾った。そしてサフィラスとオークウォリアーのところへ急いで向かう。

一方、サフィラスはオークウォリアーの攻撃をうかがいながら走った。時折飛んでくる鉄球を寸でのところでもかわすが、攻撃を避けた際に足がもつれてしまいその場で転倒してしまった。

立ち上がるうとするサフィラスにオークウォリアーが間近に迫ってきた。無表情で鉄球を振りかざすオークウォリアー。防ぐ術がないことを悟ったサフィラスは硬く目を閉じた。

バキイイイイイイイイ！！！！

すぐ近くで金属と金属が激しくぶつかる音を聞いた。痛みはいつまでたつても襲ってこなかった。サフィラスがのろのろと目を開けると……

「……………っ！！！」

自分の目の前には、歯をくいしばりオークウォリアーの攻撃を盾でふさぐルナの姿があった。

「シールドストライク！！！！！」

ルナは盾に更に力を込めた。すると押し出される盾と共に分厚い衝撃波がオークウォリアーを襲った。その衝撃波でオークウォリアーは吹っ飛び、地面に転倒する。

「ルナさん……………」

「大丈夫？サフィラス君。」

「え…ええ。僕はなんとか。」

「よかった。じゃあ、早いところあのモンスターをやっつけよ！」

ルナとサフィラスは互いに頷くと立ち上がり、武器を構えた。それと同時にオークウォリアーも起き上がり、二人に襲い掛かってきた。ルナも剣をかざし、オークウォリアーに立ち向かう。ルナとオークウォリアーの攻撃がぶつかり合う最中、サフィラスはオークウォリアー

アーの背後へと回る。そして二人は離れたところでアイコンタクトを取ると、ルナは突然オークウオリアーから距離を置いた。この時オークウオリアーは、自分が挟み撃ちにあっていることに気づいたが、すぐにサフィラスが青い槍を携え攻撃してきた。

「アイススピア!!!!!!!!!!!!!!」

青い氷の槍がオークウオリアー目掛けて向かってくる。以前のように背中のだ真ん中に当たらず、わき腹を少し抉ったぐらいだがダメージとしては十分だった。しかしそれだけではない。今度はルナが剣を構え、剣にオーラを集めて迫ってくる。

「ホーリークロス!!!!!!!!!!!!!!」

ルナがオークウオリアーの体を斬る軌跡から光の十字が現れ、貫通させた。

オークウオリアーはよろめくと派手に倒れ、そのまま黒い煙と共に消えてしまった。

「やった!!!!!!」

ルナがガッツポーズをし、サフィラスもホッと胸を撫で下ろした。しかし……

「フフフフフフ……」

そんな二人の前にオークウオリアーを召喚したデーヴァ族の女が舞い降りた。

「これが貴方達、七勇士の実力なのかしら？私が考えたのと違うわね……。勿論、悪い意味で。」

女はそういうと、フフフと不気味な笑みを浮かべる。その姿に少々腹がたつたのか、ルナはズカズカと女の前に詰め寄ってきた。

「何なの一体!!!七勇士のことを知ってる上にモンスターを出したりして!!!アンタ何者なの!!!?」

「私?」

女の不気味な笑みが更に濃くなる。それと同時に黒い煙が女の周りに立ち込める。

「私は……私の名は……カタルシス……フフフフフ。」

女は煙に吞まれ、こんな言葉を残して消え去った。

女が消え、今この場に残っているのはルナとサフィラスだけだった。ふとサフィラスが女の消えた場所を見やると、何かアイテムが落ちていた。

「ルナさん、これ……。」

ルナとサフィラスはアイテムのところへ駆け寄る。ルナは落ちていたクエストアイテム『部族の印』を拾い上げた。

「おーーーーーい!!!!!!!!!!!!!!」

その時誰かが二人を呼びながら走ってくるものがいた。ムーンラビットのヴィヴィだ。

「どうしたんだアンタら。今日は赤ネームのモンスターの反応がないのに変身しちゃってよお。」

ルナとサフィラスは何だか複雑そうな顔をした。その様子を見てヴィヴィは小首をかしげる。

「どうしたんだ？一体、何があった？？」

変身を解いたルナとサフィラスはついさっきまで起こったことをヴィヴィに話した。話を聞いていく内にヴィヴィも二人のように気難しそうな顔をする。

「ねえヴィヴィ。あのカタルシスっていう女、何者なの？」

「うん……。」

七勇士に関する事なら語りに語るヴィヴィが珍しく返答に詰まっている。

「ひょっとして、あの人も名の無き七勇士だったりして。」

「いや、それはない。」

え？とルナとサフィラスは即答したヴィヴィに顔を向ける。

「あんなようなタイプの奴は、七勇士の中にはいない。だいたい、話を聞く限りソウルストーンだって持っていないみたいじゃないか。」

「

「では…どうして彼女は名の無き七勇士のことを知っていたのでしょうか。」

再び沈黙の間が流れた。誰もその答えは分からないようだ。

「それに、彼女は普通のモンスターを召喚して僕らに襲いかかってきました。ただひとつ明らかなのは、彼女は僕らの味方ではないということだと思っんです。」

「うん！それにもしかしたらそいつ、赤ネームのモンスターとも何か関係があるかもよ。」

サフィラスとルナがそう考えるのに対し、ヴィヴィはうんと考え込む。

「少なくとも、アンタらの言ってることの可能性はある。オイラにもよく分からんが、一応またその女が現れたときには用心した方がいいかもな。」

ヴィヴィのその顔はすごく深刻そうなものだった。

ラクシの锚でヴィヴィと別れると、ルナとサフィラスの二人はラクシへレポートした。

クエストアイテム『部族の印』を見事60個集めた状態でクエストを依頼していたNPCラルガールのところへ行き、ルナは報酬の20000ルピを手に入れた。

「やったああああ20000ルピゲットオオオオオオ！！！！」

「おめでとうございます、ルナさん。」

喜びはしゃぐルナをサフィラスが穏やかに祝福する。

「よーっし！これを持って防具屋に行けば…！あ、サフィラス君もついてってよ！！」

ということでサフィラスもルナに引っ張られ、二人は防具屋に行った。

ルナは防具屋のNPCの前に立つと少しの間動かなかった。お目当てのR2の防具を購入している最中なのだろう。やっとルナがサフィラスに声をかけてきた。

「R2の防具買ったよ！！見ててね。アタシの華麗な変身ぶりを！！」
ただ装備を変えるだけなのに、なんてことを考えながらサフィラスは苦笑した。すると、ルナの着ている緑と白をベースにした上着とスカートが、一瞬にして銀色で丈夫そうな鎧にはや変りした。普通の服よりも多少丈夫そうなグレーのタイツの上に、肩と胸、そしてももから足にかけて銀色のプロテクターがつけられている。いかにも今のルナの職業であるファイターにぴったりの格好だった。

「ねえねえ！！どう？なかなか強そうに見えるでしょ？」

「え、ええ…。以前に比べれば。」

一人飛び上がるルナを横に、サフィラスはどこか懐かしさを感じていた。

（こんな感覚、何だか久しぶり。まるで…あの時みたいだ。）

サフィラスはそう思うとラクシの上に広がる青い空を見上げた。

（君と僕も、こんなカンジで…そう、ずっと一緒にいたよね。町を歩くときも、モンスターと戦うときも…ずっと一緒だったよね…。）
かつてずっと一緒にいた人物を思い浮かべながら自分の心に語るサフィラスの青い瞳は…どこか懐かしげであると同時に、寂しげだった…。

ACT4：ルナとサフィラス。相性バッチリペア？（後書き）

Rappelz 『名の無き七勇士』 プチ用語解説!？

アイテムランク

装備アイテムに必ずついているもの。装備者のレベルが高くなれば高くなるほど、ランクの高いアイテムを装備できる。R1が一番低く、R5が一番高い。

パーティー

通称PT。チームとして行動するユーザー一行のこと。
因みに組める人数は8人まで

ルピ

Rappelzにおいてのお金の通貨。円に換算するとどうなるのかは…謎。

ACT 5：パラダイスロストの悪夢。リアルとラペを隔てる想い（前書き）

R2のアイテムを装備するルピを手に入れるため、サフィラスとペアを組むルナ。そんな二人の前に謎のデーヴァ族の女が現れた。女の召喚したモンスター、オークウオリアーを倒しすルナとサフィラス。だが女は自らカタルシスと名乗り、二人の前から姿を消してしまった…。

ACT 5：パラダイスロストの悪夢。リアルとラペを隔てる想い

一昨日も昨日もまあ平和だった殿羽高校。最近は特に何事も起きず無事に豊は学校生活を送っていた。今日も豊は電車を降り、皆と違う少し遠回りの通学路を歩いて静かに登校する。

ところが今日はちっとも平和ではなかった…。

「それじゃあ、今からペアを作ってこのページの対話文をやってみようだい！よい始め！」

英語担当の教師である藤代がそう呼びかけると、生徒達はわらわらと席を立ち、友人やらを捕まえてペアを作っていく。

しかし豊は席を立たず、ただぼーっとテキストを読んでいた。自分から席を立つ気配はない。そこへ教師の藤代がやってくる。

「ユタカくん！まーだペア作ってないの？このクラスの人数、偶数何だから余りは出ないはずよ。さ、ペアを作って！」

と藤代は促す。だが複数行動が苦手な性分である豊にとってこの時間は苦痛以外何にもなかった。しかし今日はいつもと違った。

「豊君！よかつたら一緒にやらない？」

豊のところは一喜がやってきた。彼女の後ろで「一喜、いいわけー？」など半抗議の声が上がっていたが一喜は気にする素振りを見せなかった。

「まあイツキちゃん、ちょうどいいわね。じゃ、仲良くやってちょうだい。」

藤代はそういうと一喜と豊から離れて他の生徒のところへ行った。

「みちこってちよつとなれなれしいところあるよねー。」

一喜はそんなことを言いながら指定されたページを開く。

「んじゃ、さつさとやるつか。」

「は…はい…」

豊は渋々であるが頷き、一喜と英語の対話文を朗読した。

1ページ分だけある対話を朗読してもまだそれなりに時間があつた。豊はほつと息をつきつつ、教室の角にかけられている時計をチラチラと見る。

「ね、豊君ってさ……」

突然一喜が声をかけて来たので豊は肩をびくつと震わせた。

「は……い……?」

そして恐る恐る一喜の顔を見る。正直なところ、豊は態々一緒にペアを組んだ一喜がどう思っているのか怖くて考えられなかった。だからあまり顔を合わせようとしなかったのだ。ところが……

(……え……?)

予想外なことに、一喜は大して怒っているような嫌そうな顔をしてなかった。

「前に、ラペやってるって言ってたよね。」

それどころか、一喜は楽しそうな表情で自分に尋ねてくる。

「……え、ええ……。」

豊は顔をひきつらせたまま小さな声で答える。すると一喜はますます楽しそうな表情で豊に接してきた。

「じゃあね、聞いてよ！ラペですっごい楽しかったことがあったんだよ！」

「は、はあ……。」

豊は一喜の語るラペルズ話をただ呆然と聞いていた。

「昨日昼間からラペやってたんだ！ラクシで最近仲良くなったクレリックの人にあってね。一緒にPT組んで狩りに行ったんだ。あ、そうそう。アタシは1次職業ファイターなの！」

この時豊の心臓がドキリと震えた。ファイターとクレリックのペア……? 豊は固唾を飲んで一喜の話を耳を研ぎ澄ませて聞く。

「ちようどルピがなくて困ってたところだったんだ。だからクエストを手伝ってもらっちゃって。おかげでR2の鎧が買えたからホントによかったなあ。」

その時の話を聞いて豊はますます電撃に打たれたような衝撃を受けた。豊はまさかと思い、震えた声で一喜に尋ねた。

「そのクエスト…、何だったんですか…？」

豊は心の中で願った。人違いであって欲しいと…。しかしそんな豊の願いは嫌な予想と共に砕かれてしまった。

「『オークを狙え』だよ。部族の印を60個集めなきゃいけない。でも一緒にペア組んだ人のおかげで早く終わっちゃったけどね！」

「……………」

「…豊君、どうしたの？なんかすごい汗かいてるよ？」
その時だった。

「はい！おわり〜！！皆、自分の席に座って〜！！！」

藤代が大声でそういうと、教室の生徒達は一斉に自分の席へ戻り、座り始めた。

「じゃね、豊君。」

一喜も豊に軽く手を振ると自分の席へ戻っていった。

「……………」

豊は呆然となりながら一喜の後姿を眺めるばかりだった。

1限目の英語の授業が終わり、2限3限と授業が行われた。お昼休みになると生徒達は一層ざわつき始める。

一喜もお弁当を持っていつも麻美達と食べる場所へ移動した。その時にちらりと豊の机を見る。豊はやはりそこにいなかった。

「一喜。」

いつもの場所…教室の一角に着いたときに急に呼ばれ、見るといつになく真面目な表情をした友人達の顔があった。

「何…？」

「ちよつと…話があるわ。」

一喜は友人の麻美達と共に階段の踊り場のところにやってきた。

「麻美ちゃん、佳代ちゃん！話だつたら教室で出来るじゃん！」

「あのね一喜。アタシ達思つただけだ……。」

麻美が少し顔をしかめている。その隣で佳代が腕を組んで一喜をじつと見る。

「水嶋とは関わらない方が絶対いいと思うの。」

「……………え？」

「アイツが今どういう状況だか分かつてるでしょ？だから絡んだりなんかしたら、きつとろくなこと起きないわよ。アイツだって迷惑がつてるだろうし。」

「え…ま、まあ確かに豊君は……。」

正直、豊が楽しい学校生活を送っているとは到底言えない。豊はことあるごとにクラスの男子生徒から冷やかされたり、いたずらをされることがある。何事にも積極的でない性格の所為か、女子生徒にも一部毛嫌いされている。

「だいたい、どうして英語の時アイツと組もうと思つたわけ？」

佳代が責めるように尋ねる。

「それは今日の人数はちょうど偶数だし、豊君も、誰かと組まなくちゃいけないわけ……。」

「ペアなんて無理やり3人にしちゃうことも出来るのよ！」

「ま、まあ佳代。その変にして。」

半分キレているように見える佳代を麻美が制止した。佳代も、豊を毛嫌いしている女子生徒達の一人なのだ。

「でも一喜、佳代の言うことも分かるわ。心配なのよ。一喜が水嶋と楽しそうにしているところを見て男子達がアンタにまでからかってくるかもしれないじゃない。ね？」

「麻美ちゃん、佳代ちゃん……。」

一喜はこの時考えた。

（そしたら、豊君はどうなっちゃうんだろ……。ちよつと、かわいそうじゃない？）

でもそんなことを言うと二人が、特に佳代が何か言うだろうから言

わなないことにした。

「うん、分かったよ。」

「頼むわよ一喜。」

心の中ではまだ納得していない部分があったがとりあえず一喜達は教室へ戻った。

(一体……どういうこと……？まさか、光山さんが……)

今日の授業が全て終わった後、そんなことを考えながら殿羽駅までの道を歩く時だった。

「よお水嶋。」

弾かれたように振り向くがいつの間にか豊は数人の男に囲まれている。皆、豊と同じ殿羽高校の制服を着ている。男達の輪の中から一人の男子生徒が豊の前まで歩く。

「水嶋。お前今日は持つてるだろ。」

「……………」

豊は下を向いたまま首を振った。

「とぼけるんじゃないねー！隣町の塾に通うぐらいの金があるなら俺らにやる金もあるだろがー！」

至近距離で怒鳴られ、思わず豊は耳を塞いだ。だがすぐ立ち直ると、黙って男達の輪から離れようとした。それは金を要求した男子生徒の怒りを煽ってしまう。

「あんだその態度はあああ！」

男子生徒は豊のブラウスの襟首を引っ張り、顎を掴んで自分の方向けさせて怒鳴り散らすとそのままコンクリートの道路へ豊を倒した。

コンクリートに打たれて痛みが伴う頭を抱える隙に数人の男が豊の体を拘束しにかかった。

一人は両足を押さえ付け、もう一人は豊のズボンのポケットからハンカチを取り出すと、それを両手首にきつく縛る。そしてもう一人はどこから持ってきたのか、ガムテープを引くとそれを豊の口にべ

つたりと貼った。
気づけばさっきの男子生徒が馬乗りになってこちらをじっと見ている。

「観念したか。さつさと持つてるものをよこせよ。」

しかし豊は堅く目を閉じ、必死で首を振る。その直後にパシンと乾いた音が響き渡った。後からじんわりと右頬が腫れる痛みを感じる。「次はこんなじゃすまねえぞ、さつさと出せよ。」

豊は半分涙目になっていた。それでも首を縦に振ることなく、ただムームーと言葉にならない声を塞がれたガムテープの向こうから必死で出した。

すると男子生徒は急に黙りだした。豊は疑問に思い、のろのろと目を開ける。目を開いた瞬間、視界に入ったのは不気味な程にやにやしている男子生徒の顔だった。

突然男子生徒が豊のブラウスを掴み、引きちぎるように開けた。ポタンの弾ける音と共に胸元を露にさせられた。それから自身のポケットから何かを取り出す。それは…校則で禁じられている煙草だ。それから更に同じポケットから安物のライターを取り出し、カチツと火をつけて豊の胸元へゆっくりと近づける。

「……………!!!?」

豊は目を大きく見開いた。殺される……………!!真っ先にそう考えた。そこから感じる恐怖のあまりに声も出なかった。ライターの火がどんどん迫ってくる。そして肌に触れそうになる時だった。

「…ふう。」

男子生徒は突然ライターを引っ込めた。そして代わりに取り出した1本の煙草に火をつけ、馬乗りの状態のまま煙草をふかし始める。

豊は抵抗もせず、ただその様子をぼーっと見てるだけだった。だが…安心するのはまだ早かった…。

「おい、その鞆の中身を探れ。使えそうなもんあったら出せ。」
周りの男達にそう命じると男子生徒は嫌な笑い声を上げて吸った煙草を豊の胸元へ近づけた。

「!!!!!!?」

「てめーがさっさと出すもん出さないからだろ!こいつはおしおきだぜ!!!」

煙草の火傷の後を残す気なのだろう。先からはもくもくと煙が上がっていた。今度こそ、逃げ場がない。豊が恐怖のあまり、硬直したその時だった。

「もしもし、警察ですか?大変なんです!!集団で誰かに暴行を!!!!!!」

少し離れたところから女の大声が聞こえた。その声を聞いた瞬間、男子生徒は慌てて煙草とライターをしまうと…

「おい、ずかるぞ!!!」

と叫んで取り巻きの男達と共にその場から逃げ去っていった。拘束された豊と放り出された鞆だけがその場に残された。

「大丈夫!!!?」

携帯電話を切り、閉じながら一喜が駆け寄るが豊のひどい姿に一喜はひっと息を呑んだ。

とりあえず一喜はまず口に貼られたガムテープを剥がし、両手首をしぼるハンカチを解いた。

ガムテープを剥がした瞬間、豊はものすごい勢いで咳き込む。

「ひ…ひかりやまさん……。」

「豊君……どうしてこんな」

「……気に、しないで下さい。」

豊はのろのろと立ち上がり、ふらふら歩くと道路の上に投げ出された鞆を拾う。

「でも、こんなのひどすぎるよ!豊君、何にも悪くないでしょ!それなのに……。」

「光山さん……。」

豊はパンパンと制服の汚れを払うと、一喜にくるりと背を向けた。

「気持ち、とても嬉しいです。でも…あまり必要以上に僕に関わらない方が…いいと思います。」

「え……………」

一喜は豊の言ったことに目をパチクリさせる。だがその直後に一喜は言い返す。

「でも豊君！！豊君は…本当にそう思ってるの！！？本当にそれでいいの！？」

「今日は、本当に感謝してます。ありがとうございました。」

それだけ言うと豊は振り向くことなく、駅に向かって歩いていった。

豊はその体のまま殿羽町から少し離れた地元の塾へ向かった。

地元ではさっきのように自分を嘲る者はいないが親しい者もない。

豊にとって塾は静かで落ち着く場所だがそれでも彼は独りだ。

豊は何も言わずに自分のクラスの教室に入った。この塾のクラスはDからSクラスまでであるが、豊はその中でも最高のSクラスだ。

今日は豊以外にSクラスの生徒はまだ誰も来ていないようだ。豊は塾で使用するテキストを取り出すと暇つぶしがてら前回の授業の復習を始めた。

教室に来てから大分時間がたった。もう授業開始時間を過ぎている。教師が来てもおおかしくない時間なのに誰も来ていない。何分たっても変わらない。豊は不審に思い始めた。

そっと教室を抜け、チューターのいるフロントに向かう。だがそこで豊は信じられないものを見た。

「……………これは…。」

フロントには多くの生徒達と教師がいた。しかしその場にいた全員がある状態を抱え、倒れこんでいた。

「せ、先生！これは一体…！」

豊は自分の授業を担当する教師のところへ駆けつけ、上体をそっと起こした。その教師は過呼吸を起こし、苦しそうに息をしている。意識も朦朧としているようだ。

豊は愕然となり辺りを見回した。周りで倒れている人達も同じよう

に過呼吸を起こしていた。苦しそうな声が耳に響く。

豊は血相を変えて飛び出した。そして携帯電話を取り出すと、119とダイヤルを入れる。電話は少したってから繋がった。

「も、もしもし！助けて下さい！人が…沢山の人が……！！！」

しかし携帯電話の向こうから聞こえたのは…

「ハア……ハア……た……たす……け……」

豊の眼鏡の奥の瞳が凍りついた…。

結局、誰も助けることが出来なかった。豊は逃げるように塾から去り、そつと帰宅する。家には、いきなり過呼吸を起こしたりしないいつも通りの母がいた。

「お帰りなさい、豊。」

「うん…只今…」

「豊、凄く疲れた顔をしているわ。今日はもう早く休みなさい。」母のいつもの優しい声を聞くことが出来て豊はとても安心した。今日は本当に荒んだ一日だった。豊はお言葉に甘えて休むことにし、疲れきった体を引きずって自分の部屋へ行った。

布団をしいて横になった時、ふとあるものが視界に映った。

（パソコン……）

豊の机にはデスク型の少し古いパソコンがあった。パソコンをしばらく眺めて豊は考える。

（塾の皆が苦しむ原因……て……まさか）

豊はのろのろと起き上がり、パソコンの電源をつけ、ラペルズを起動した。が、キャラクター選択画面まで来たところで豊はマウスを止めた。

マウスを動かそうとする手が小刻みに震えていた。英語でペアを組んだ時に聞いた一喜の話が脳裏に浮かぶ。

（……駄目だ……。今は、彼女とどういう顔をして会えばいいのかわからない……）

そう思ったつとログアウトしてしまい、パソコンの電源を切っ

まった。

(ごめんなさい…ルナさん……。)

頭の中で呟くと豊は布団に潜り、そのまま眠ってしまった。
キャンセルされたキャラクター選択画面にはサフィラスの姿があった……。

結局、精神的疲れが取れないまま豊は学校へ向かった。それだけではない。何か妙な予感がするのだ。豊はそつと校舎に入り、自分のクラスの教室まで来たところで立ち止まった。

何か話声が聞こえる。豊はドアにそつと耳をたてた。

「光山あ、昨日はよくもやってくれたなあ……」

一喜のところに男子生徒が数人たかっていた。豊に火傷を負わせようとした男子生徒とその取り巻き達だ。

「暴力がいけないことぐらい誰だって知ってるでしょ？それを止めて何が悪いの!？」

一喜は真剣な表情で男子生徒を睨む。麻美と佳代も教室の隅っこで震えていた。

「おめーさ、水嶋に気があるわけ？」

「お、マジかよ!」

ヒューヒューと一喜の周りの男子生徒達がはやしたてる。

「そういう風に思わなくなつてアタシは考えるよ。どうして豊君があんな目にあわなきゃいけないわけ!？」

麻美が「一喜!」と声を上げるが男子生徒の一人に睨まれヒツと教室の隅へ逃げた。一喜は構わず続ける。

「豊君がアンタ達に何かしたわけ？違うでしょ!そんなのタダのいじめだよ!」

「んあ?」

男子生徒はすごい形相で一喜に顔を近付ける。

「光山よあ、ちょっと可愛い顔してっからって生意気なこと言つとお……」

「やめて下さい！」

豊が一喜と男子生徒の間に割って入ってきた。

「豊君！」

「てめー！水嶋！！！」

男子生徒がいきりたち豊の胸ぐらを掴む。

「ま、待って！！！」

一喜が止めに入ったが何と豊が空いた手でそれを制した。

「ひ…光山…さんを…責め…るのは…やめ…て…くだ…さい…」

光山さんは…悪く…ない、から…。」

「豊君！」

一喜が声を上げると同時に男子生徒は豊を投げ倒した。そこらにあった椅子や机が派手にひっくり返る。一喜が血相を変えて豊のところへ駆けよってきた。

「豊君！大丈夫！？」

豊はゆっくりと上半身を起こす。口を切ってしまったのだろう。唇の端から微量の血がこぼれる。

「光山さんは…ただ…僕を…助けて…くれようと…する…だけ…」

悪いのは…何も…出来ない…僕…だか…ら…。」

「そうだぜ水嶋。」

男子生徒は豊の肩を鷲掴みにし、無理矢理立たせる。

「てめーが俺らの言うことを聞かねーからだ。分かってるんなら今日こそ出せよ！」

男子生徒が拳を振り上げようとした時だった。

「う……………！！！」

突然、男子生徒がその場にうずくまり、胸ぐらを必死で抑え始めた。僅かに蚊の鳴くような息づかいが聞こえる。すると周りの生徒達も急に苦しみもがき出した。

豊は愕然となった。

「これは…塾の時の…」

豊の隣から苦しそうな声が聞こえた。気付けば一喜も膝をつき、苦

しそくに肩で呼吸をしている。

「光山さん!!」

豊はかがみこみ、少しでも一喜を楽にしようと背中にも手を回した。
が…

「ゆたかくん…なんともないなら…に…にげ…て…」

「そ、そんな…!」

「こ…ここに…いたら…あぶ…な…」

「ならせめて光山さんも一緒に!」

豊は一喜の方に手を回し立ち上がりさせようとした。だが一喜はニッコリと笑うと緩く首を振った。

「いそいで…アタシなら…ほんつと…大丈夫…だから…」

「でも…!」

「ゆたかくんが…たすけを…呼んでくれれば…皆、たすかるよ…だから…早く…」

豊はその場で立ち尽くし、頭を抱えた。正直、冷静になることなど出来ず、どうすればいいか分からなくなっていたのだ。一喜に背を向ける形で顔を歪ませ拳を握りしめる。そして…

(ごめんなさい…)

人に聞こえないように呟くと豊はドアを開け放ち、教室を出ていった…。

結局、どこの教室を覗いても自分のクラスと同じ状況だった。何ともない生徒や教師など一人もいなかった。

(また…僕は酷いことを…)

また逃げるように自宅に戻った豊は机に肘を付き、頭を抱えていた。目の前に置いてあるパソコンを見て更に自分を責める。

(もし昨日、ラペにログインして赤ネームのモンスターを見つけていれば…今日みたいなことにならなかつたかもしれないのに…) 痛い程感じる自分の身勝手さを思うと悔し涙が出てきた。

(赤ネームのモンスターさえ…)

心の中でまた自分を責めようとした時、豊はガバツと顔を上げる。
「そうか…。まだ、終わりじゃない。皆を助ける方法が…まだ残って…！」

豊はパソコンの電源を入れ、ラペルズを起動した。

（皆を苦しめるものの正体がラペルズにいる赤ネームのモンスターだとしたら…今ソイツを倒すのは僕しかない！）

豊は自分のキャラクターを選ぶとラペルズへログインした…。

ここはカタン地方。どんよりとした紫色の空の下、険しい岩山が街を覆う。街の中心には血よりも熱い赤色の噴水があり、その周りの何人かのNPC達が困う。そこへサフィラスは舞い降りた。

サフィラスが動こうとすると同時に、青色のソウルストーンが反応した。まるで自分を待っていたかのように。サフィラスはミニマップを拡大し、赤ネームのモンスターの居場所をキヤッチした。

「場所は、カタン西フィールド…。もしかして。」
サフィラスはオルニトにまたがると、反応した場所へと急いで向かった。

カタン西フィールドは木も少ないだっぴろい荒地のようなところだ。そこには様々なレベルのモンスターがうろついている、時々冒険者を襲うことがある。

そんな荒地にただ1匹、赤色で名前を表記されたモンスターがさまよっている。

赤をベースにした鎧と丸いヘルメット、細長い剣と小さな盾を装備した骸骨の姿をしていた。

骸骨のモンスターは自分のところへ向かってくるサフィラスを見つけてるとしゃがれた声で嗤う。

『また、またオレ様のために自ら餌がやってきた。ケケケケ…。』

「やっぱり、リアルで塾や学校の皆を苦しめたのは貴方だったのですね！！パラダイスロスト！！！」

サフィラスはソウルストーンを掲げ、叫んだ。

ジヨブチェンジ オン ウォータ！！！！！！！！

青いオーラに包まれ、サフィラスはプリーストヘジヨブチェンジした。

メイスを構えると、正面から骸骨のモンスター、パラダイスロストへぶつかっていく。

剣とメイスが激しくぶつかりあう中、パラダイスロストは隙を与えぬよう休むことなく剣をつきつけてきた。サフィラスも負けじとメイスで受け止めていく。

またサフィラスのメイスとパラダイスロストの剣がぶつかった時、サフィラスはメイスの受けた衝撃に振り回されてしまった。ふらついているその隙に、相手の剣の刃がサフィラスの腹部に振り下ろされた。

「……………！！！」

サフィラスはその場で横倒れになり、苦しそうな表情で斬りつけられた腹部を腕にあてた。

そこへ笑い声と共にパラダイスロストが近づく。

「イタイか？苦しいか？どっちもか？？」

パラダイスロストは笑いながらしゃがめた声で尋ねる。しかしサフィラスはその場でうずくまるだけで何も答えない。するとパラダイスロストは腹部を押さえるサフィラスの腕を無理やり掴み、仰向けに寝かす。そして片腕の盾と共に両腕を拘束した。

「楽になる方法、教えてやろうか？」

パラダイスロストのぎらぎらとした青い瞳のない目が迫ってくる。だがサフィラスはただにらみつけるばかりだ。

『ソウルストーンをくれ。そうしたら楽にしてやる。』

この時だけサフィラスは反応した。はつきりと首を横に振り、拒否を示す。

するとパラダイスロストは笑いながら剣の切りっ先をサフィラスの首につきつけてきた。

『あっちの世界で人間共が苦しむのはお前のせいだ。お前が、ソウルストーンを渡さないからだ。ソウルストーンを渡せば皆楽になる。そうだろ？』

「確かに…リアルで学校や塾の皆があんな目にあつたのは、僕のせいかもしれない。でも…」

サフィラスは拘束された両腕にそつと力を込めた。サフィラスの手がわずかに青く光る。

「それは、僕がソウルストーンを渡そうとしないからじゃない…。皆を苦しめているのは貴方であることを知っておきながら、目先の不安のためだけに逃げ出してしまったからだ！！」
するとサフィラスの手に青い氷の槍が召喚された。

「アイススピア！！！！！！」

サフィラス自身が拘束されているにも関わらず、氷の槍は盾を貫通し、パラダイスロストの肩に深くつきささった。パラダイスロストはとっさに首筋につきつけた剣をどけて声を上げた。
するとパラダイスロストの目に怒気はらんだ。

『このガキが！！地獄を味わうがいいわ！！』

間髪いれず、パラダイスロストはサフィラスの肩口に剣を突き刺した。

「ああー！！！！！！！！！！」

サフィラスは痛みに耐え切れず悲鳴を上げた。腕を動かすことも出
来ず、ぞくぞくと痛みが駆け巡る。

『ケケケケ、いいざまだ。もっといたぶってやる。ソウルストーン
をもらうまで…。』

狂気に満ちた顔でパラダイスロストが再び剣を振り上げた時だった。
「!!!!??」

パラダイスロストの目の前に何かが飛びついてきた。飛びついてきたそれはパラダイスロストの顔面にはりつき、視界を奪った。

「なんじゃこれはー!!!」

パラダイスロストは剣やら盾やらがむしやりに振り回し暴れる。その隙にサフィラスは誰かに支えられた。サフィラスは自分を支える人物を見て凍りついた。

「サフィラス君、しっかり!!!」

そう、昨日から会いたくないと思っていた人物、ルナだった。ジョブチェンジをしてナイトになっている状態だ。そしてパラダイスロストに張り付いているのは紛れもなくヴィヴィだ。

「ルナーーー! もういいかー!?!」

「うん、オツケーだよ!!!」

ヴィヴィがパラダイスロストの顔面からパツと離れた。目の前の光景がようやく見えるようになるとパラダイスロストは暴れるのをやめる。

「ヴィヴィ、サフィラス君をお願い。」

「任せとけ。」

サフィラスをヴィヴィに預けるとルナは長剣を構え、パラダイスロストを真っ直ぐ見据える。

「よくもサフィラス君を! 絶対に許せない!!!」

ルナはパラダイスロストに攻撃をしかけるため、正面から向かった。パラダイスロストはルナの剣を防ぐが、前のアイスパアのダメーシやヴィヴィを振りほどくために体力を消耗したためか、多少動きが鈍くなっていた。

ルナはパラダイスロストから一度距離を置くと、再び剣を構えた。剣からは光のオーラが溢れる。

「ホーリークロス!!!!!!!」

ルナの剣が十字の軌跡を描く。それは光の刃となり、パラダイスロストを貫いた。

「ば、ばかなー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

パラダイスロストはしゃがれた声で叫ぶと木っ端微塵に吹き飛んだ。

ルナはその様子を見た次の瞬間、サフィラスとヴィヴィのところへかけていった。

「サフィラス君！！」

慌てた様子で一人と一匹のところに駆けつけるルナ。ヴィヴィは冷静な表情で、

「深手は負ってるが命に別状はない。」

と答えた。ルナは表情をホッとさせ、サフィラスの傍に屈む。サフィラスはパラダイスロストから負ったダメージの影響でぐったりとしていた。

「何だか…僕…情けないですね…。」

「え……？」

ルナは不思議そうな顔でサフィラスの顔を覗き込む。サフィラスは自嘲気味に話し始めた。

「皆を…助けようと…モンスターに向かっていったら…逆に助けられてしまつて…。」

「サフィラス君…。」

「リアルでも…僕はどうしようもない人で…でも、そんな僕に手を差し伸べてくれる人がいて…それなのに僕は…その人が本当の意味で離れてしまうのが怖くて…それどころか逆にその人を傷つけてしまつて…。」

自嘲気味に話すサフィラスの目に涙が溜まり始める。

「それなのに…僕は…誰も助けることが出来なくて…。」

ルナは力なく下がるサフィラスの手をそっと握った。

「サフィラス君…つて…つてもスゴイね。」

「え……………」

呆気にとられるサフィラスの隣にルナは腰を下ろした。

「アタシ、リアルだと学生何だけど、クラスメートにスゴイ人がいるんだ。」

「スゴイ人……………」

サフィラスは首を傾げる。自分のクラスメートにいるルナ…いや、一喜にとつてのスゴイ人など誰のことか分からなかった。

「その人はね、勉強は完璧でスポーツもそこそこ出来るの。ただ…」

「ただ……………」

思わずサフィラスは聞き返す。

「すごく大人しい人だから…こんなこと言いたくないけど、周りの人にかかわれたりいじめられたりしてるんだ。」

サフィラスは目を暫くパチクリさせる。それからルナがふいに口を開いた。

「アタシ、いじめとかはやっぱ嫌だからさ、一度止めたことがあるの。そしたらその人をいじめてた男子達がさ、アタシに色々言い寄ってきたんだよ。」

それを聞いた瞬間、サフィラスは身をこわばらせた。自分もルナの語るその状況に覚えがあった。リアルで男子達に捕まった所を一喜が助けてくれた、あの光景を思い出す。

「こっからスゴイんだよ！そのいじめられた当事者がいきなり出てきて、言い寄られてるアタシをかばってくれたの！クラスの皆の前でだよ？すごくない？」

更にサフィラスは固まって興奮ぎみに話すルナをじっと見つめる。そんなサフィラスをよそにルナは更に話を続ける。

「そしたらさ！急にアタシ、なんか息苦しくなっちゃって大変なことになっちゃったの！多分、さっきのモンスターの仕業だったんだろうけど。そしたらその人はね、アタシのところに来て一緒に逃げようって言ったの。」

「……………」

「とつても、嬉しかった。下手したら自分まで危なくなるって時に、すぐに逃げたりせず、手を貸そうとしてくれた。ホントに嬉しかったの。」

「え……………??」

サフィラスは目を丸くした。自分が考えていた彼女の気持ちと、今、彼女の口からこぼれた気持ちとが全然違っていたからだ。恐らく彼女の言うことに嘘はない。ルナは、サフィラスが豊であることを知らないからだ…。

「サフィラス君って、その人に何だか似てる。自分が傷つくかもしれないのに、それでも誰かを助けようとしてくれるから。やっぱりアタシ、その人ともっと仲良くなりたいな……………サフィラス君？」

ルナはようやくサフィラスの異変に気がついた。サフィラスの目から大量の涙が溢れ出ている。自分でも止められないほど、声を上げられないほど、涙は止まることなく頬を伝って流れていた。

「す…すみ…ません…。何だか…急に…」

サフィラスは涙を手で拭いた。手をどけると、心配そうなルナの顔がそこにあつた。

「大丈夫??？」

「え…ええ……………」

サフィラスは静かに呼吸を整えた。目を閉じて大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。そしてようやく落ち着くと、ゆっくりとしゃべり始めた。

「ルナさん、やはり思うのですが…その人とは今まで通り、あまりなれなれしくしない方がいいと思います。」

「ええ!?!?どうして?!?!?」

ルナが少し不満げに聞き返す。

「その人をからかう人達がいきなり心変わりするとは思えません。だから、きつとその人は、自分のせいでルナさんが傷つくのを恐れているでしょう。でも…」

この時、サフィラスがふわりと優しく微笑んだ。

「その人はこの世界に必ずやってきます。だからきつと、ここでなら仲良く出来ますよ。きつと……。」

「そっか……。そういえば、そうだ。ラペやってるって言うってたもんね……。」

ルナも笑い返し、サフィラスの手をまた握った。

「うん、分かったよ……。ありがとう……サフィラス君。」

サフィラスも上半身をそっと起こして微笑みながら頷いた。

（礼を言うのは、僕の方。本当に、本当にありがとう。ルナさん……

光山さん……）

嬉しそうな表情を浮かべるサフィラスを、遠くからヴィヴィが黙って見ていた。

ある学校の帰り、一喜は荷物をまとめて帰宅の準備をしている。ふと離れたところへ視線をやると、そこにはまだノートに何やら書き込んでいる豊がいた。ふいに豊がこちらを向いた。二人の視線がぴたりと合う。その時、一喜は軽くウィンクをして席を立つ。豊もそれに応えるよ

うにぎこちなく笑った……。

ACT5：パラダイスロストの悪夢。リアルとラペを隔てる想い（後書き）

Rappelz 『名の無き七勇士』 プチ用語解説!？

クレリック

デーヴァ族の術士系1次職業。回復魔法やバフ強化魔法を得意とする。サフィラスもこの職業である。

カタン

闇の属性を主体とするアシュラ族の街。血の噴水を中心に広がる各広場に魔方陣が張られていたり、どこか不気味な雰囲気をもし出す。

ACT 6：心優しきガイアの勇士、魔闘士ベルヴォーグ！（前書き）

一喜との会話でルナが一喜自身であることを知ってしまった豊。彼は一喜と…ラペルズでルナと関わることに不安を募らせていく。そんな中、リアルで怪事件を起こしたパラダイスロストを倒すため、豊の分身であるサフィラスが単身立ち向かう。苦戦するも、後にサフィラスは後から駆けつけたルナの真意を聞き、心を開くことが出来たのであった…。

ACT 6：心優しきガイアの勇士、魔闘士ベルヴォーグ！

「一喜〜!!」

一喜の友人の一人である鏡子が手を振って駆けよってきた。

「鏡子ちゃん、どーしたの？」

一喜が嬉しそうな表情で駆け寄る鏡子を見て尋ねる。

「聞いて一喜！あのね、あの小説…『恋人はそよ風』が実写で映画になるのよ!!」

「恋人はそよ風……？」

「もう！相変わらず一喜は遅れてるわね。」

首を傾げる一喜のところへ麻美がやってきて解説する。

「『恋人はそよ風』は、風上光雄^{カザカミツオ}って言う作家が書いた人気のライトノベルなのよ。鏡子ってそういうの好きよね。」

「勿論よ、すごく面白いじゃない。麻美もどう？」

「わ…私はいいや。」

麻美が苦笑して言うと鏡子はちよっぴり残念そうな顔をした。

「でもすごい売り上げだったんだろうねー。実写で映画化されるぐらいなんですよ？」

「……一喜だったら知ってると思ったのに……。」

え？と一喜は目をしばたかせる。

「だって…出演俳優の中にLUNAがいたもの。」

「え!?!LUNAが!?!?」

LUNAという名前を聞いた途端、一喜が目を輝かせる。

「そうよ。これ、見てよ。」

鏡子の広げた雑誌にはLUNAと当の小説の著者との会見の様子を写したページがあった。

高層ホテルの窓の向こうには町の高い景色を見渡すことが出来る。会見を終えた風上光雄はコンパクトカメラを掲げ、窓の景色の写真

をただひとり撮る。

「取材の合間をぬって仕事かしら？」

光雄が振り向くとその先にはスタイルの良い黒髪の女性がいた。

「LUNAさん、貴方こそこんなところなの？」

暖かみのある低い声で光雄は聞き返す。

「マネージャーのいない隙にこっそり抜けてきたの。今頃あの面白おかしい顔をしてしどろもどろになっているでしょうね。」

「…は、はあ…」

反応に少し困った光雄は曖昧な返事をする。

「ここっていい景色よね。特に夜は。」

「そうですね。ここに限らず、夜景は美しいものですよ。」

「……そうね…。何時までこの夜景が美しく見えるかしら。」

「???？」

「何だか不思議そうな顔をしているわね。」

LUNAが光雄の顔を見ておかしそうに笑う。

するとLUNAはくるりと光雄に背を向け軽く手を振って歩き出した。

「縁があつたらまた会いましょ。」

そういつてLUNAは去った。

「何が言いたかったんだ、あの人は。」

少し困ったような表情で光雄は手の中にあるコンパクトカメラに視線を落とす。

その夜、光雄は電車のホームを降り自宅に向かって歩き出した。

最寄駅から自宅までは少し距離があり、繁華街や線路の上に掛かる鉄橋を渡らなければならない。

光雄の渡る鉄橋は、都郊外で働く人々がよく利用する。造られてから数年はたつがそれなりに頑丈だ。

今日も光雄は当たり前のように淡々と鉄橋を登る。光雄は一度立ち止まり、辺りを見回した。橋の下を覗けば4本のレールが敷かれ、

その先には踏切がある。レールの左右には小高いビルが壁のように立ち並ぶ。

(この絶景ポイントは押さえたな…)

なんてことを考えながら橋を渡る人の流れに乗せて降りようとした時だった。

ピシ… と嫌な音が光雄の耳に入る……。

「……………!?!」

だが反応した時には遅かった。嫌な音は更に連鎖するように鳴り出し、コンクリートの床にヒビが入る。そして…

ガシャーンと大きな音がするのと同時に鉄橋がまっぴたつに割れた。割れた橋は急速に下の線路に向かって落下する。橋の上にいる人々が悲鳴をあげながら巻き込まれていく。光雄はとっさに近くにあったガードレールの縦棒を掴み、何とかやりすごす。その時…

「さとみ!!!」

橋の上から女の叫ぶ声が聞こえる。女は光雄を見ているようだ。というより光雄自身よりその近くにいるものを見ている。ふと視線を動かすと自分のごく近くにガードレールにしがみつく小さな女の子が青ざめた顔で震えていた。

「ママ……………」

女の子はもう半泣きの状態だった。橋の上にいる女も血相を変えてわが子を見守っている。

しかし事態は最悪な結末を迎えた。真つ二つに割れた鉄橋に更にヒビが入ったのだ。光雄と女の子のちょうど間に。そして橋は音をたてて崩れ落ちた…。

光雄より低い場所にあるガードレールにしがみついた女の子は悲鳴を上げること出来ず、顔を真っ青にして橋と周りの悲鳴と共に落ちていった。

「さとみ……………!!!」

女が悲鳴に似た声で叫ぶ。光雄はただその様子をガードレールにぶらさがりながら見るだけだった。レスキュー隊が現れて光雄達を救助したのはそれから数十分後のことであった。

.....

ここはガイア族の住む緑豊かな町、ホライズンのはずれにある森。そこに一人の呪術士がやってきた。彼の名前はベルヴォーグ。髪の毛はこげ茶色でストレート。白と明るい茶色の綿で出来たゆつたりとした法衣を身にまとっている。身体つきはがっしりとしていて口周りに薄い髭を生やしている。そして手には両手で持つほどの大きなメイスが。

「.....!!」

彼の背後から突然青と白の羽を持つ鳥のモンスターが襲いかかってきた。モンスターはかん高い声を上げ嘴で突きかかってきた。それに対しベルヴォーグはメイスを横に振るった。メイスの先端のハンマーのような部分がモンスターの急所に当たった。モンスターは一撃でノックアウトされその場でフラフラしながら転がった。

「ふう.....。」

ベルヴォーグが一息ついたときだった。

“あなた...あなた.....”

遠いところから声が聞こえてきた。その声に耳を傾げるべくベルヴォーグは立ち止まる。

.....

「どっしたんだ。」

パソコンから目を離し、光雄は背後にいる妻を振り返る。

「いいえ、何だか今日は珍しくラペルズに食いついているように見えたから、何があったのかと思って。」

「……………」

光雄は視線を部屋の床に落とした。

「だいたいそんなボロボロの状態で帰ってきておいてどうして何も教えてくれないの？私にも話せないことなの？」

「すまない……………」

光雄は視線を落としたまま、帰りに巻き込まれた鉄橋の事故のことを話した。ポツリポツリと、話すに連れて途切れ途切れになりながら。そして少女を助けることが出来なかったことにひどく罪悪感を感じていた。

「いやー、も大変だったよ。橋一つなくなるだけでこんなにも大変になるなんて。」

「そうなんですか。」

アルバイト先のイージーカフェの厨房で一喜は同僚の男性と談笑していた。平日は客はそんなに多くなく、こうして談笑出来るほど暇になることもある。

「あれだつて3年ぐらい前に工事したばっかなんだぜ？」

「え…それって結構最近ですね。」

一喜は疑問に思った。改築されて3年しかたっていない鉄橋がこんなにも簡単に崩れるものだろうか。ふと、一喜はあることが気になりだした。

「そっいえば大石さんは？この時間にもついているはずですよね？」

「…あ、ああ…それなんだが…」

男は微妙な表情をする。

「店長はここに行こうとした途中…」

「すまない、遅くなった。」

男が何か言いかけたところで仕事着の店長大石がやってきた。

「店長!!!」

一喜の顔がぱあっと明るくなる。

「店長！大丈夫だったんすか！？」

男が血相を変えて尋ねる。

「ああ、すごくびっくりしたけど俺は何ともないよ。」

「何があっただんですか？」

一喜が尋ねると大石が笑いながら答える。

「歩いてる途中に建てられていた建設中のビルが急に崩れ出してね。

危うく鉄筋コンクリートの雪崩れに巻き込まれるところだったよ。」

「え、ええええ！？」

一喜は驚いて大石を見上げる。だが見たところ外傷はなさそうに見えた。

「大したことはなかったよ。さっきも言っただけど本当に何ともなかったから。」

「ぶ…無事で良かったです。」

そして心の底から安堵し、ほっと胸を撫で下ろした。

「さ、遅れた分気合い入れていこう！」

「はい！！！」

こうして一喜達は各々の仕事を始める。

(これはきつとラペと何か関係あるかも)

一喜はイージーカフェのカウンターに着くと時間までもりもり仕事をした。そして帰宅するとラペルズを起動し、ログインするのだった。

.....

「それだけじゃないんだよ！バイトから帰ってきたら鉄塔が立て続けに崩れる事故がニュースで流れてたの。」

「ふう〜〜む…」

ルナがリアルでの事情を話すとヴィヴィは何やら難しそうな顔をする。

「ヴィヴィ、これって赤ネのモンスターの仕業だよな？」

「ハッキリとはしないが…それでもあんな事故が立て続けに起きているのは怪しいな。」

「だよな！…でもどうしてハッキリしないわけ？」

「赤ネームのモンスターの反応がまだないんだ。」

「……………」

うんとルナは腕を組んで考える。

「…てちよつと待って？ここは町の中だよ？」

「それで？」

ヴィヴィは何とも思う素振りを見せずに聞き返す。

「え、だから…何で町の中にヴィヴィがいるわけ？町には入れないんじゃないの？」

「あ…そういうことか。」

ヴィヴィは大してどうとも感じてなさそうだった。

「ここ、ホライズンだけは例外なんだ。町とその外の境が一番曖昧でな。あれをしてみる。」

「ん〜？」

ルナはヴィヴィの促した方向へ顔を向けた。そこには全身がまっつきつきでダチヨウのような鳥がいた。

「あ、プチガルス…。」

頭上にあるHPゲージからこのプチガルスはモンスターであることが分かる。

「こんな風に普通のモンスターだっているだろ？だからオイラもホライズンに堂々と入れるのさ。」

確かに周りの皆はヴィヴィやプチガルスに目もくれていない。まるでここにモンスターがいるのが当たり前前みたいに。

「いいのかな？皆、ほったからかしてるけど。」

プチガルスを無視して通り過ぎる人達を見てルナは思った。

「いいだろ。アクティブじゃないから無理に倒す必要もない。」

言われてみればプチガルスの方からも攻撃しようとする様子がない。本当にただほつき歩いているだけみたいだ。そんな光景をぼーっ

と見ていた時……

「……………！！！」

ヴィヴィの顔つきが変わった。ルナが不思議そうに尋ねる。

「ヴィヴィ？」

「……………来る。」

まさかと思い、ルナはミニマップを確認した。そこでルナは赤ネームのモンスターの居所を示す赤い点を見つける。

「赤ネームのモンスター！しかも場所は…ホライズン！？」

その直後にルナとヴィヴィは離れた所から女性の悲鳴を聞いた。

「……………！あれは……」

町のと真ん中で一匹のモンスターが暴れている。黒く丸くて硬い甲羅を持った大きな亀だ。甲羅から伸びる首と足と尻尾は象のようになっている。瞳は白く濁っている。

「あ！あれ知ってる！あれって陸亀だよな！？」

「あれは陸亀族の中で最も強いアイアンスカーだ！」

アイアンスカーはそこらのアクティブモンスター以上に暴れ、町にいる人々を襲っていく。

「アイアンスカーってここから南の砂丘の絶壁にいる奴だろ！？」

「どーしてこんな町中にいるの！？」

突然の赤ネームのモンスターの出現にホライズンにいるプレイヤー達も困惑し逃げ惑う。一刻もこの場所から脱出しようとテレポーターの所に沢山のプレイヤーが押しかける。

「……………！？な、何だ？この異様な人ばかりは。」

そこへベルヴォーグが帰還してきた。彼はいつになく酷い人混みに焦りを隠せなかった。そして更に……

「……………！モンスターだと……！！？」

アイアンスカーが無差別にプレイヤーや普通のモンスターを襲っている。周りに誰もいなくなるとアイアンスカーはプレイヤー達が逃げ込んでいるテレポーターへの所へ近付いてきた。

「このままじゃ町にいるプレイヤーが危ないぞ！ルナ！！」
「うん！！」
ルナはソウルストーンを掲げて叫ぶ。

「ジョブチェンジ オン ライト！！！！！！！！」

光のオーラに包まれ、ルナはナイトにジョブチェンジした。

多くのプレイヤーの波に押され、ベルヴオーグは動くこともままならない状態だった。やっとのことでテレポーターから少し離れたが……
「！！！！！！」

そこでアイアンスカーがこちらへ向かう姿を見てしまう。

（来る……）

逃げなければとベルヴオーグは思った。だが彼の足は全く動かない。いや、動けないのだ。プレイヤーが溜まっている影響ではない。どこからか押し寄せる恐怖の波のようだった。

（これは…ゲームだ…。やられてもやり直すことが出来る…。それなのに…何故だ…何故こんなに怯えているんだ…。）
そう、それは崩れた鉄橋に巻き込まれかけたときのような恐怖感だった。

ベルヴオーグはこのわけの分からない事態に混乱する。しかし時間は待ってくれない。こうしている間にもアイアンスカーが迫ってくる。

「ま…待ってくれ…」

アイアンスカーは確実にこちらへ向かってくる。

「待って…くれ…」

恐怖で言葉が途切れ途切れになる。しかしそんなことに構うことなくモンスターは迫ってきた。

悲鳴と怒号の飛び交う空間の中、ベルヴオーグは固まる。そして目の前にはアイアンスカーの顔が。

「ひっ……！」

ベルヴオーグは思わず目を固く閉じた。すると……

「ホーリークロス……！！！」

その声と共に光の十字がアイアンスカーにぶつかる。唸り声を上げて足を止めるアイアンスカー。何事かと思い、ベルヴオーグは閉じた目をゆつくりと開けた。

すると自分の目の前には眩しい程白い鎧を身に纏ったデーヴァ族の女が。

「大丈夫！？」

アイアンスカーにダメージを与えたルナは後ろにいるベルヴオーグへ振り向く。

「あ……ああ……！」

ベルヴオーグの頭は真っ白だった。もう何が何だか理解出来なかった。

「ルナ、アイアンスカーはのろまな分体力とパワーがある。油断するな！」

「オツケー！」

いつの間にかベルヴオーグの近くまできたヴィヴィのアドバイスを受け、ルナはいきりたつアイアンスカーに向かっていった。

「……………」

ベルヴオーグは呆然と今のやり取りを見ていた。そしてポソリと口を開く。

「……ウサギが……しゃべった……」

その一言をヴィヴィは聞き逃さなかった。

「……アンタ、オイラの声が聞こえるのか！？」

「……ああ……聞こえる……ハッキリと。」

やはり聞き間違いではなかった。ベルヴォーグの言葉にヴィヴィは反応を示したのだ。

「オイラの言葉が分かるなら話が早い！アンタに手伝って欲しいところがあるんだ！」

「私に…手伝って欲しいことだと？」

ベルヴォーグはヴィヴィにゆっくりと尋ねつつ冷静さを取り戻そうとする。

「そうだ。アンタに、ここホライズンで立ち往生してる奴らの誘導をして欲しい。」

「誘導…？」

「ああ。冷静に考えてみる。ああやってテレポーターのところに戻ってたら、何も出来ずにガタガタになってエラー落ちするだけだろ？」

「……………」

次第に落ち着きを取り戻したベルヴォーグはヴィヴィに言われた通り周りを冷静に見る。確かに脱出口はレポートだけではないような気がする。考えると他にも方法がある気がしてきた。

「分かった。私にどこまで出来るか分からないが引き受けよう。」

「頼むぞ。オイラの声は一部を除いた他の奴には聞こえないからな。」

テレポーターの周りはまだ逃げ惑うプレイヤーで混雑していた。

ベルヴォーグはテレポーターの近くまで来ると人々に何度も呼びかけた。

「皆！落ち着くんのだ！此処にいてもしょうがないだろう！落ち着くんのだ！」

ベルヴォーグは必死で呼びかけた。

「シクルトに行ける者は優先的にそちらへ行くんだ！帰還の呪文書を持っているものは惜しまずに使え！あのモンスターのことは気に

する必要などない！此処の脱出に専念しろ！」

するとベルヴォーグの呼びかけが通じたのか、ノロノロとプレイヤ―達が散っていく。

「そうそう！その調子だ！いいぞアンタ！」

ヴィヴィが褒める中、ベルヴォーグは一息つくと離れた所でアイアンスカーと戦うルナを見やる。

「はっ！！！」

ルナは剣をアイアンスカーに向けてふりかざす。しかしアイアンスカーの甲羅は固く、剣は弾かれてしまう。そこへアイアンスカーが首を伸ばし噛みつきこうとしてきた。

「……っ！」

ルナは反射的に攻撃をかわした。さっきからこの繰り返しだ。

「私の剣じゃ甲羅はダメ…？だったら…」

アイアンスカーが首を伸ばしてきた。

「狙うは首！！！」

ルナはアイアンスカーの首に当てようとした。が…

「！！！！！」

アイアンスカーは直前に首を引つ込めてしまった。それこそ本物の亀みたく。そしてルナが目を見開いた隙について頭突きをかました。

「きゃああ！！！」

ルナはお腹を突かれ、衝撃で地面を滑る。顔を歪ませ突かれたお腹を抑える。

そこへアイアンスカーが口を大きく開けて襲いかかってきた。

「っ！！！！！！！」

ルナは盾を掲げてアイアンスカーの口を塞ぐ。

（な、何コイツ…すごいパワー…）

アイアンスカーの力に負けぬようルナは盾に力を込めた。が…

「！！！！！！！」

アイアンスカーは持ち前の力で首を大きく振り、ルナを盾ごと投げ

飛ばした。

「きゃああああ！」

放り投げられたルナの身体は大きな建物の壁に叩きつけられた。

「ルナ！！！！！」

その様子を見てヴィヴィは愕然となる。

隣でベルヴォーグも驚きながら見ていた。

「あの子は…一体何者なんだ？」

ベルヴォーグの問いに一瞬目を見開いたヴィヴィだが先ほどの愕然とした様子とは打ってかわって平然とした素振りで答える。

「アイツは赤ネームのモンスターと戦えるちよつと変わった奴だ。

ルナ、しつかりするんだ！！！」

しかしルナを見るヴィヴィの表情は愕然となった表情そのものだった。

ルナのところへアイアンスカーが迫る。

「ルナー！！！」

ヴィヴィが絶叫する。ふとベルヴォーグの脳裏にリアルで巻き込まれた鉄橋の事故が蘇る。

「さとみー！！！」

割れた鉄橋の上から女が悲鳴に似た声で叫ぶ。

鉄橋のガードレールに自分と少女がつかまってぶらさがっている。

少女との距離はそんなに離れていない。自分が手を伸ばそうとすれば少女の手をとることだって出来る。

しかし……

（そうだ、手を伸ばせば助けることだって出来たはずだ…。それなのに何も出来なかった。いや、しなかった。私は事をただ黙って見ていただけだ。そして今も…）

ベルヴォーグは両手メイスを持つとアイアンスカーの所へ走り出し

た。

「待て！アンタの力じゃソイツには傷一つつけないぞ！」

ヴィヴィが慌てて引き留めるがベルヴォーグは立ち止まるうとしない。そんなベルヴォーグにある異変が起きた。

「……！な、何だこれは……！！！」

ベルヴォーグは思わず立ち止まり、自分の身体を見下ろす。ベルヴォーグの身体中に輝く緑の光溢れ出る。

「待て！待つんだ！」

ヴィヴィが慌てて追いかけてきた。

「通りでアンタがオイラの声を聞くことが出来たわけだ。あのモンスターのとこへ行く前にこれを持って！」

ヴィヴィは宙がえりをするところアイテムをドロップした。ベルヴォーグは足元に転がったそれを拾った。

「ソウルストーンだ。これを使えばアンタもアイアンスカーと戦うことが出来る。」

「私もなのか？」

「ああ、頼む！」

ベルヴォーグはしばらくそのソウルストーンを眺めたが、やがて意を決して緑色に輝くソウルストーンを握りしめ、そして高く掲げた。

「ジョブチェンジ オン ウィンディ！！！！！！！！！」

するとベルヴォーグの身体が緑の竜巻のようなものに包まれる。竜巻が消えたときにはベルヴォーグの身に付けている防具と武器が変化していた。

「おおおお！これは…風と誠実を司る勇士、魔闘士だ！」

変身したベルヴォーグを見てヴィヴィは目をキラキラさせる。

「ハッ！」

ベルヴォーグのメイスから風の刃が放たれる。それをアイアンスカ―はもろにくらい、後退した。

ルナは思わずベルヴォーグを見上げる。

「大丈夫か？」

「あ…アンタは？」

立ち上がったルナが尋ねかけたところでアイアンスカーが声を上げる。

「ルナ！この勇士、魔闘士と共に早いとこ倒すんだ！」

離れたところからヴィヴィの叫ぶ声が聞こえる。

「勇士！？それに魔闘士って……」

「ああ。どうやらこの私のようなだ。」

少し困った顔をしながらベルヴォーグはじつとアイアンスカーを見据える。ルナとベルヴォーグは互いに頷くと武器を構えて攻撃をしかけた。

「アイアンスカーは亀だ！甲羅以外の部分を狙うぞ！」

「分かった！！」

ベルヴォーグの助言にルナが答えると、ルナは剣をアイアンスカーの尻尾にたたきつけた。するとアイアンスカーは先ほど以上に声を上げて悶える。

「次は私の番だ！」

ベルヴォーグはハンマーのようなメイスの先端をアイアンスカーの平たい足に勢いよくおろす。アイアンスカーを挟むようにしてルナとベルヴォーグは立つ。

アイアンスカーが唸り声を上げながらベルヴォーグに迫ってきた。

ベルヴォーグは目を閉じ、メイスを横に構える。するとメイスからオーラが立ち、それは風の刃に変化する。

「喰らえ！！風の乱切り！！！！」

メイスから放たれた無数の風の刃がアイアンスカーの至る部分を貫通する。アイアンスカーは悶え苦しむとそのまま爆発して消えた…。

ジョブチェンジの解けたベルヴォーグは呆然としたまま爆発したアイアンスカーの方へ視線を向けたままだった。

「……………」

「この様子だと、今のラペの現状をまだ分かってないようだな。」
ヴィヴィに声をかけられてベルヴオーグは我に返る。その隣には同じくジヨブチェンジを解いたルナがいた。戦ったときは真っ白な鎧を身に付けていた彼女も今の姿形からした一般の冒険者となんら変わりない。

「ああ。何が何だかさっぱりだ。先の戦いもそうだった。本当に無我夢中で…。それだけではない。リアルでも私は事故に巻き込まれた。」

「リアルでの事故？」

ヴィヴィは怪訝そうな顔で聞き返す。

「それって、歩道橋が急に真っ二つになったってアレ!？」

ベルヴオーグが言う前にルナが口を挟んできた。ベルヴオーグは無言で頷く。

「そうか、それは不運だったな。」

「どういうことだ？」

ヴィヴィの言ったことに対してベルヴオーグは思わず聞き返す。

「後で調べて分かったんだが、あの鉄橋の事故の原因はあのアイアンスカーだったんだ。」

「何だつて!?!？」

いきなりそんなことを言われても信じられなかった。このラペルズの世界に現れた赤ネームのアイアンスカーが自分を巻き込んだ事故の原因だといわれても実感がわかない。

「鉄橋や鉄塔が次々と倒壊されている事件がおきたときとだいたい近い時期に、赤ネームのモンスターの兆しがあった。そうやって今までヤツラはこの世界に現れ、プレイヤーを襲い続けたんだ。」

「そんな……………」

ベルヴオーグは次々と明かされる二つの世界の惨状を知り、愕然となる。

「リアルに影響を及ぼすそんなモンスター達を倒すために、ルナが

そしてアンタがいる。」

「私も…?」

「だって、さつきみたいにあたしと同じ勇士になってモンスターと戦うことが出来たじゃん。だからあたしと同じ世界に平和をもたらす七勇士の一人なんだよ。」

ルナもヴィヴィと共に、固まってるベルヴォーグに声をかける。

「だからこれから一緒に戦っていき。ね?」

ベルヴォーグは複雑な表情で俯いた。あの時巻き込まれた鉄橋の事故の様子が脳裏に浮かぶ。だがやがて小さく息を吐くと、ルナとヴィヴィの方へ顔を向けて言う。

「ああ、分かった。私もお前達と共にリアルの皆を、そしてラペへ降り立つ者達を守っていこう。」

ルナはヴィヴィと顔を合わせ、嬉しそうに頷き合う。

「ところで、アンタの名前は?」

ヴィヴィはふとこんな質問をベルヴォーグにした。

「私は、ベルヴォーグという。」

「あたしはルナ。よろしくね、ベルヴォーグ君。」

「ベ…ベルヴォーグ君は…ちょっと恥ずかしいな。」

「え、そう?じゃあ、ベルヴォーグさん!ならいい?」

「まあ、いいだろう。」

ルナとヴィヴィ、そしてベルヴォーグの背後には、ホライズンの象徴である宮殿、自由の殿堂をバックに地平線へ沈もうとする夕日があった。

しかしそんな夕日と彼らを含みのある笑みを浮かべて見る者がいた…。

ACT6：心優しきガイアの勇士、魔闘士ベルヴォーグ！（後書き）

Rappelz 『名の無き七勇士』 プチ用語解説！？

ガイア族

ラペルズの世界に住む人種のひとつ。茶髪・赤髪の者が多く、他の種族よりも強靱な体力を持つ。また、地・水・火・風の4つの力を授かっている。

ホライズン

ガイア族の住む町。自由の殿堂という大きな屋敷のようなものを中心に周りをNPCの開く店で囲っている。境が非常に曖昧なため、稀に近くのモンスターが侵入することもある。

アクティブ

攻撃しようとしてこないモンスターに対し、この属性を持ったモンスターはプレイヤーが近くに来ると自分から攻撃をしかけてくる。そして違う地域にプレイヤーが逃げ込むまでプレイヤーを狙い続ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9803c/>

Rappelz ~ 名の無き七勇士 ~

2010年10月28日07時30分発行